

年上少女の軌跡より

kanaumi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クロスベル自治州・クロスベル市・駅前通り、その日は朝から雨が降っていた。通りは傘を持つ人が行き交っていた。しかし、柱に横たわる少女には気づかなかった。少女の服は雨で濡れ、体は震えていた。しかし、通行人は少女を見ない、傘を持って前だけ見て歩いていく。少女は傘も持たずに雨を受けていた。まるで何かを待つかのよう……

不定期に更新しますとても遅かったり早くなったりです
手直しは誤字合わせて行います。

目次

プロローグ

3冊目	p 100	4月9日	L	1
3冊目	p 254	9月10日	食事会 1	8
3冊目	p 254	9月10日	食事会 2	16
3冊目	p 359	12月23日	ウルスラ・クリスマスパ	1
テイル I				
?冊目	p ???	?月?日	私と僕はー	32
3冊目	p 360	12月24日	ウルスラ・クリスマスパ	1
テイル II				
4冊目	p 71	3月12日	忙しい時には	46
4冊目	p 107	4月17日	帝国へ	53
4冊目	p 107	4月17日	アルベルト	59
?冊目	p ???	4月17日	エリオットくん	64
4冊目	p 198	7月14日	雨が降るから	73
6冊目	p 65	2月5日	外れてくれない事	76
9冊目	p 322	11月21日	雨音のクロスベル	79

プロローグ

3冊目 p100 4月9日 L

色とりどりの傘を片手に人々はぽつりっ、ぽつりっ、と降り出した雨の中を流れるように歩いていった。その流れを遠くから眺める者がいるならば、まるで色とりどりの花が流れているように見えるだろう。だが、その者も花に隠れる草には目が行かないだろう。雨の中道急ぐ人々の視線は前にしか向かず、遠くからの目も届かない。そこに街頭に横たわる少女がいたとしても。

僕は自分のことをほとんど覚えていない。この世界の事、目の前に広がるビルやオブジェ、自分の事以外は覚えているのに自分の名前、年齢、育った場所なんかは一つも覚えてない。ぼやけるとかじやなくて、その記憶だけ綺麗に無くなっているような感じだ。自分の事以外はわかるから生きてはいけるけど、自分の事を知らないと帰る場所がない。自分の家がどこにあるかも、家族が誰かもわからない。気がついたらこの場所にいた。帰る場所も家族もわからない、途方に暮れてた僕だけど、今もちゃんと生きている。僕を助けてくれたお姉さんのおかげで。

「あなた、大丈夫？」

その日は、予報では良く晴れてお散歩日和だったけど、天気予報が大きく外れた雨の日だった。雨宿りする家も屋根も無かった僕は、全身ずぶ濡れだった。頭も痛く、すごく体がだるかった。その時の僕は、熱とか風邪とかわからなかったから特に気にしてなかった、後に聞いたらとても酷い状態だったそうだ。

「あなた、名前は？」

「……エル」

「そう、エルちゃん、お父さんやお母さんは？」

「……いない」

「……そうなの」

この後、1つ2つ質問して来たが、こっちが答えるたびに顔が引きつっていった。

「……………クシユン…」

「…ん？どうしたの？……………大変！酷い熱だわ、どうしましょう…」

僕はこの時、僕の額に手を当てて、困った顔をしているのを黙って見ていた。

「……………」

「……………」

しばらく見つめあっていると、何かを決心したように僕を見つめた。

「……………ねえ、エルちゃん…」

姉さんに助けられ、家に連れて行かれた。そこで、姉さんが姉さんの親に説明して、条件付きで僕を置いて貰えるようにしてくれた。事件は、僕の親が見つかるまでの間だけ預かるっというものだ。姉さんの知り合いの警察官に依頼したけれども、僕の親は見つからなかった。姉さんの知り合いの警察の人も一生懸命探してくれたけど見つからなかった。1年経っても見つからなく姉さんの親からは見つかるまでいいと言われたが、申し訳なくて仕方なかった。それから、数ヶ月経った頃姉さんの家に姉さんが依頼した警察官の人が訪ねてきた。

「すみません、警察の者ですが…」

「……………はい、お待ちしていました。ガイさん」

「セシル、おばさん達は？」

「今、出かけてるわ、後で話すから教えて」

「……………わかった」

姉さんが警察官の人を居間に連れて来た。大きくて見上げないと顔が見えなかった。こちらを見て、元気そうな顔で微笑んでくれた。

「エルちゃん、この人はガイ・バニングスと言って、あなたの両親を探して貰ったの」

「こんにちは、ガイ・バニングスだ、セシルの頼みで君の両親の身元を

調査してきた」

「エルです。……それで、どうでした？」

聞くとガイさんは、眉を落とした。

「…あー、何というかな…」

「…見つからなかったの？」

「……………すまない！必死に探したんですが、君の両親の行方はわからなかった……………ただ…君の出身地と名前はわかった。…」

ガイさんは、頭が机につく位下げて言った。その後、顔を上げて遠くを見ながら黙った。

「……………」

「ガイさん？」

少しして、ガイさんは口を開いた。

「エルちゃん、君は帝国の人間だって事調べていてわかった」

「帝国って、エレボニア帝国？」

「ああ、君がセシルに助けられた時着ていた服あるだろ？証拠になるかと思つてセシルに見せてもらつて調べたら、その服は帝国のブランドの服だった」

あの時に着てた服……………そういえば、クロスベルの百貨店《タイムズ》では、見たこと無いかも。けれども…

「けれども、ガイさんそれだけじゃあ…」

「ああ、貿易を活発に行うこのクロスベルじゃあ、帝国のブランドが有つたつて珍しい事じゃ無い、だけど、調べたらその服は帝都ヘイムダルでしか売られていない物だった。そこで、帝都の住民票で君の事を探したんだ。そしたら、エル・エルフィミンという少女が見つかった。写真は無かったが、君の名前とセシルに助けられた時期が彼女と一致しているんだ。」

「…時期？」

「ああ、彼女は8ヶ月前に行方不明になっているんだ。理由は…帝国からカルバード行き列車の脱線事故だ」

「脱線事故ってあの？」

「ああ、原因不明のその事故でエルフィミン一家含む15人が未だ行

方不明だ…その時乗ってた女性から君らしき人が列車に乗車していたとの証言から帝国大使館に確認したら君がエル・エルフィミンだと判明した。」

「そう……」

エル・エルフィミン……それが僕の名前……なぜだかその名前は胸にストンと落ちた。これが自分の名前なのだと言わんばかりに。

「エル・エルフィミン……うん、そうだと思う……フフツ♪」

「エルちゃん……」

何か、姉さんの目が……恥ずかしい

「……ウウ、…それより、僕の両親は」

「……」

ガイさんがまた難しそうな顔をした。しばらく何か考えた後、口を開いた。

「……さつきも言った通り、見つかってはいない。ただ、君と同じようにカルバードかその周辺にいるかもしれないと思ったが探しても見つからなかった。脱線事故当時も生存者の確認、捜索も行っているが場所の問題であまり捜査出来ていなかったがエルフィミンご夫妻は見つかっていないんだ」

「そうですか……」

「本当にごめんな？ 御両親はちゃんと見つけて来るからな」

ガイさんは優しく頭を撫でてくれた。撫でてくれるのは嬉しいけど、少し恥ずかしいかな。

「フフツ、エルちゃん嬉しそうね」

「………うう、……」

「……さてと、そろそろ行くとするか」

そう、言うときガイさんは撫でるのを止めて立ち上がった。頭から手が離れるとつい 「……あつ」 つと声が出た。

「それじゃあ仕事に戻るよ、エルちゃんどんな形であっても必ず見つけて来るからな……セシルの所で元気にしてるんだぞ？」

「はい、よろしく願います」

「ガイさん、仕事頑張ってください」

「ああ！またな」

そう言つて、ガイさんは家をあとにした。ガイさんはとても大きくて優しい人だった、今思えば、あの時ガイさんが遠くを見たのは、僕に本当の事言うのが辛かったからなのでは？と思つてる。

それから、一年後僕の両親が見つかった、帝国のノルド平原で死体で見つかった。死因は餓死だった。状態も悪く死んでからだいぶ経つたようだった。遺体はクロスベルの協会に運ばれた。葬式は行われなかったがレイテさんマイルズさんガイさん姉さんのおかげで墓には入れてもらえた。火葬する前に両親を見せて貰つた。

「……………この人達が僕の両親……」

「ああ、エルちゃんの両親だ」

「エルちゃん、大丈夫？」

「……………多分、です」

頭の中が真っ白でそれしか言えなかった。

その後、父母を入れた棺桶は火葬され骨を墓に納めた。その帰り…姉さんとふたりでノイエス家に帰っていた。ガイさんとレイテさんとマイルズさんは後処理を買つて出てくれたためまだ教会にいる。

「エルちゃん、これを」

「……………これは？」

姉さんが見してくれたのはケースに入った朱色の宝石のついた十字架のネックレスだった。

「これは、エルちゃんのお父様のポケットに入っていた物よ、ケースの裏を見てみて」

言われた通りケースの裏を見て僕は驚いた。そこには小さく「エル・エルフィミンへ」とかかかっていた。

「……………」

「多分、エルちゃんに渡すために用意された物よ、ガイさんから葬式の後に渡されたの」

姉さんが何か言っているけど僕の耳には入って来なかった。僕は手に持っているネックレスしか目に入っていなかった。ケースから出して手に持つてみると軽くなぜかあつたかく感じた。

「…エルちゃん？」

「…きれい…」

ネックレスは見てると吸い込まれそうなほど綺麗だった。

「…どうしたの？」

ネックレスは夕日に当たってキラキラと光っている。

「エルちゃん、エルちゃん、どうしたの？」

「…あれ？」

突然左右に揺らされ僕ははっとした。キョロキョロと周りを見て自分がネックレスを見て意識が飛んでいた事にきずいた。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫大丈夫」

「本当？」

「うん、ネックレスがきれいだったから」

「かけてみたらどうかしら？そのままケースき入れて置くのも、多分ちがうと思うわ」

「わかった」

かけてみると、懐かしくあったかいと感じた。少し振ってみると周りの光に反射してキラキラとひかっている。2、3回振っていると光のせいなのかまばたきが増えてきた。もう2、3回振ると目尻が暑くなった。もう、2回振ると暖かいものが頬を伝った。

「…あれ？…」

「…エルちゃん、」

頬を触ると湿っていた。姉さんの方を見て初めて気がついた、自分が涙を流したのだと。

「涙…：…なんで…：…だろ？…：…ハハツ…：…葬式の時も出なかったのに…：…なんで…」

「エルちゃん！」

姉さんが抱き付いてきた、暖かい、とても暖かい、でも、涙が止まらない何でだろ？

「姉さん、止まらないよ涙」

「良いの、今は泣いて良いのよ」

その後、僕は泣き続けた、自分が何で泣いてるのかわからなかったけど姉さんの胸で泣き続けた。姉さんは泣いている間ずっと頭を撫でてくれた。しばらく泣き続け泣き疲れて寝てしまった。家族が楽しそうに食卓を囲んで笑っている夢を見た。

あれから、僕は少し大人になった。背も2センチ伸びて目線が少し高くなった。誤差かも知れないけど……。もしあの時姉さんが声をかけてくれなかったらどうなっていたのだろうか？両親の葬式を挙げる事もこうして自分の成長を喜んだりも出来なかったかもしれない。最近になって知ったけど、ここ、クロスベルに孤児院のような場所は無いようで協会も在るけど、子供を預かったりはしていないらしい。僕には姉さんがいるけども、いない子供も多い。旧市街地には、子ども達だけのマンションが在る。場所だけ与えて、後は自分でどうにかしなさいと、大きい女性の人がマンションの鍵だけ置いていったそうだ。雨宿りできる所が在っても、生活が楽になるわけでは無いが帰る場所ができて子ども達はとても喜んでいた。もしかしたら自分もそこに暮らしていたのかもしれない、だから、姉さんにはとても感謝しているいくら恩返しをしても足りないと思うくらい。

「エル、ご飯にしましよー」

「はい、わかりました、姉さん」

僕は女性の声に呼ばれて、開いていた日記を閉じた。返事をして声の持ち主の元に向かう。僕を救ってくれたお姉さんの元へ。

七耀暦1197年 4月9日

拜啓、僕が姉さんに助けられてから3年の月日が流れました。3年間の中で沢山の人に出会ったんだよ、友達もたくさんできたよ。悲しい事も楽しい事もあったよ。姉さんに新しいお父さん、お母さんもある。寂しくないよ？心配しないでいいよ。お父さん、お母さん、僕はここで元気に生きています。だから、遠くでも見守ってください。

くエル・エルフィミンよりく

お父さんとお母さんの葬式をして、僕がノイエス家の一員となつてもう5ヶ月位になる。だいぶこの生活にも慣れて来た。お母さんやお父さんとも良く喋れるようになった。最初の頃は言葉が詰まったり姉さんに隠れたりしてた、居候してた時はしゃべりもしなかった。けど家族になつて生活してくと普通に喋れるくらいになった。

姉さんが友達の家に遊びに行った日の事だ。そのときは姉さんが居なくてじつと動かなかつたけど、お父さんが話しかけてくれた。内容は、僕の名前についてだった。僕は最初、ノイエス家の一員になるのだから名前もエル・エルフィミンからエル・ノイエスになるのかと思っていた。けど、お父さんからそのままがいいと言ってくれたので僕の名前はエル・エルフィミンのままだ。でも、家族になつたのに一人だけ違うという所にノイエス家と自分に距離を感じた。でも、お母さんは何か感じたのか変わりに自分達をお母さんとお父さんって呼んで欲しいと言った。変わりになるならと了承して、試しに呼んでみた。「お母さん」つと、すると自分の奥底から何か吹き出すのを感じた。一瞬何か解らなかつた、けど、お母さんに抱きしめられると自分に何が起こつたのかは分かつた。けれども、解らなかつた。何故？何故？と考えたが解らなかつた。考えて、考えて、考えたが解らなかつた。寂しかったのだろうか？それも有つたけど違つた。今、思うと嬉しかつたのだと思う、姉さんやお母さん、お父さんと一緒に暮らしていたけどそれは家族ではなくて預かつて貰つてる人達という関係だったから、一人だと思つたのだと思う。それに、あの時は名前以外殆ど昔の事覚えていなかったから余計に一人だと思つたのだと思う。だから、家族が母親が出来たんだと嬉しくつて安心したんだと思う。それから、10分位泣いていた。その間ずっとお母さんは抱きしめていてくれた。

僕も落ち着いた位にお父さんが僕の今後について話し出した。

「エル、落ち着いたかい？」

お父さんは優しく僕に聞いた。

「…うん、落ち着いた。」

「良かった、急に泣き出すから心配したよ。」

「ごめんなさい…」

「別に怒ってないよ、でも、辛いのに僕達の前で我慢しなくても良いんだよ？まあ、辛かったらセシルに言っても良いしね。」

そう言っ頭を撫でてくれた。とても丁寧に優しく撫でてくれた。

犬だったら尻尾を振ってたと思う位気持ち良かった。

「さてと、エルも落ち着いたしお昼ご飯でも食べようか。」

「そうですね、エルちゃんは何が食べたいですか？」

「えーと…ビーフシチュー…かな。」

「ビーフシチューねえ…。」

お母さんは、少し悩んで頷いた。

「では、あなたタリーズ商店に行って肉と野菜を買ってきてくださる？」

「わかった、すぐ買ってくるよ。」

そう言うと、お父さんはカバンを持って駆け足で出て行った。

「エルちゃん、あなたには少し遠いけどお使いを頼みたいの、良い？」

「お使い？何をすれば良いの？」

「エルちゃんにはミルクとコーヒーの豆を買って来て欲しいの。」

「どこに？」

「中央広場の百貨店に行って買って欲しいの。場所、わかる？」

中央広場…百貨店…うん、場所はわかる。

「わかるよ。大丈夫、行ってくるね。」

返事をするとお母さんは何かを思い出したのかバタバタとキッチンの方へ向かった。

「エルちゃん買ったらこの鞆を入れてね、急がなくて良いからね。」

「うん、行ってきます。」

お母さんが用意してくれたカバンにお金と地図を入れて家を出た。

「少し心配だけど大丈夫よね。さあ、こっちも準備しなくちゃ！」

料理の準備をしようとキッチンに向かおうと歩き出すと、ピンポンと呼び鈴がなった。

「すみませーん。」

「あら、誰かしら？はい、今行きまーす。」

ドアを開けるとそこには制服を身につけたガイがいた。

「…あら、ガイ君じゃないお仕事終わったの？」

「いえ、これからです。」

「…そう、セシルに用事？」

「あ、えっとセシルではなくて、今日仕事で夕御飯に間に合わなそうなのでロイドをお願いしたいんです。」

「…ロイド君を？…あらそう、わかったわ。」

「では、よろしくお願いします。」

「…お仕事頑張ってね。」

「はい」

ガイが走って階段を昇っていくのを見届けて、キッチンに向かった。

僕はアパルトメント《ベルハイム》を出て真っ直ぐ歩いた。姉さんと一緒の時は通りのカフェに寄ったけど今は関係無いので真っ直ぐ進む。お母さんは急がなくても良いと言っていたけど百貨店までは歩いて十分位歩く。

「百貨店、相変わらず遠いなあ。」

しかし、十分というのは大人の歩幅での話で子供ではもう少し時間がかかり遠いと感じる位ある。

「そういえば…もう少ししたら僕の誕生日何だっけ？ガイさんが見してくれた住民票にそう書いてあったし。」

誕生日と聞いてもパツとしないけどお母さん達がお祝いしてくれると言っていたので凄く楽しみだ。…そういえば、記憶を失う前はど

うだったのだろうか？一般的に誕生日ってパーティーしてプレゼント貰ってとても楽しい日だって聞いたけどどんなパーティーしてたのかな？プレゼントって何貰ったのかな？ちよつと気になるなあ。つと百貨店までの道が思っていたより長いので関係ないことを考えながら歩いていた。

「あつー！」

それから、少し歩いて中央広場が見えて来たところで見覚えのある人影を見つけた。

「ん？」

その人は背が高く、青に近い黒っぽい色をした髪をしていた。

「えっと…あの、葬式の時にガイさんの隣にいた人ですよね？」

「……ああ、君か。元気そうだな。」

「はい！……えーと……お名前……そういえばあの時お名前聞いてませんでした。」

「ん？そうだったか。」

うん、確かあの時泣いてはなかったけどあんまり周りの声が聞こえなかったし、ガイさんと話するとき近くにいなかったはずだし。でも、式の時は何でか周りを見渡してた時にガイさんの隣に見えたから何でか覚えてた。

「ふむ、では自己紹介をしよう。アリオス・マクレインだ」

「アリオス……さんですね。えっと、エル・エルフィミンです。よろしくお願ひします。」

「……ああ、よろしく頼む。」

「アリオスさんは何をしていたんですか？」

訪ねるとアリオスさんは少し考える素振りをした。

「……ふむ、事件の捜査……だな。」

アリオスさんははつきりとしなない言い方だった。何か言いにくい事があったのかな。

「まあ、人を待っている。…君は買い物かな、私事は良いから君の用事を済ませると良い。」

「あ、はい、そうします。では、失礼します。」

「ああ」

アリオスさんに別れを告げて百貨店に向けて歩き出した。

アリオスは彼女を見送り、ノイエス家に向かったガイを待っていた。
た。

「おつ、アリオス待つってたのか？」

その後、しばらく待つと待ち人が現れた。

「ああ、用事は済んだのか？」

「ああ、ばつちしだ。」

「ならば、行くぞ場所はここから遠いからな。」

これから行くマインツには、通常時はバスで行くが今回は依頼の関係から徒歩で行くことになっていた。

「ああ」

今は、11時か、マインツには3時位につくだろう。着いたら昼食を取れるように行動しよう。

アリオスさんと別れてしばらく歩き中央広場の百貨店《タイムズ》にたどり着いた。

「やつと着いた。隣の区なのに遠すぎる。」

家を出てから30分途中アリオスさんと話してたけど10分位だったから20分位かあ。遠いなあ。

「とりあえず、ミルクとコーヒー豆だね。」

メモを見て確認して百貨店に入った。

「いらっしやいませ。百貨店《タイムズ》においでくださりありがとうございます。百貨店《タイムズ》には様々な品物を取り揃えています。百貨店《タイムズ》には様々な品物を取り揃えています。百貨店《タイムズ》には様々な品物を取り揃えています。百貨店《タイムズ》には様々な品物を取り揃えています。」

百貨店に入ると黒い服を着た男性に声をかけられた。

「えっと……」

急な事でどうしたら良いのかわからず辺りを見渡していると男性は再度声をかけてきた。

「……お一人様ですか？」

「えっ……はい。」

男性は少し考える仕草をした。

少しの間考え、男性は此方の目線に合わせて質問した。

「……何を探しですか？」

「…ミルクとコーヒー豆を」

「ミルクとコーヒー豆ですね、それでしたら彼方です。…ご案内いたしましょうか。」

男性は右の方向を見て、案内するかと聞いてきた。

百貨店は広く自分だけでは迷子になると思って、話に乗ることにした。

「えっと、お願いします。」

「はい、承りました、こちらです。」

男性は頷き、歩き始めた。

「此方が、お客様のご希望の品がある食品売り場《リジョンフード》でございいます。」

食品売り場は入り口入って右の所にあった。

「ありがとうございます、助かりました。」

「いえいえ、では。」

「はい。」

男性はお辞儀をして先ほどいた所に戻って行った。

「さてとミルクとコーヒー豆！」

「お買い上げ誠にありがとうございます。」

無事目的の物を買えた。けれども、百貨店が思いのほか遠かったため少し疲れてきた。

「ミルクが重い…」

遠い事もあったがさらに買ったミルクが予想より重かったのだ。帰りも来た道を通るので20分かかると考えると歩く気もなくなるものだ。めんどくさいなんて考えていた。

「ようしょ、ようしょ」

買った物を入れてるカバンを両手に持って一歩一歩歩いてきた。来るときの半分以下のスピードで。

「ただいま、…ハア…戻り、ました。」

汗で前が見難くなつてはいるが無事帰ってきた。

「ハア、ハア、ハア」

立つ力もないのか入口で膝をかがめて手をついてゼエゼエと呼吸をしている。

呼吸を整えてると奥からお母さんがやってきた。

「エルちゃん、おかえり……」

お母さんは僕を見て、驚いたようだ。疲れて見れてないけど。

「エルちゃん、まずはお風呂よ！上がった頃にはご飯は出来てるから。」

僕はお母さんに抱えられお風呂に連れていかれた。

「ハアー♪気持ちいい。」

汗を流し、湯に浸かって、体を伸ばした。バキバキなんて言わないけれどとても気持ちいい。ポカポカだ。

「気持ちいいー♪」

お風呂に入ると嫌でもテンションが可笑しくなる。それほど気持ちのいい風呂でした。

「♪」

「あら、気持ち良かった？」

「うんー！」

「それは良かったは、さあ、エルちゃんも上がった事ですし昼食にしましょう。エルちゃん、お父さんを読んできてくれる？」

「わかった。」

お父さんの部屋はリビングの隣の部屋で、中で本の整理なんかを休みの日に行っています。

「お父さん、昼食出来たって。」

呼びかけるとゴソゴソと音をたててお父さんが出てきた。

「ああ、エルも帰ってきたか、おかえりなさい。」

「ただいま、お父さん。じゃあ、行こう。」

「うん、お腹すいたしね。」

リビングに向かうと美味しそうな匂いが漂ってきた。

昼食は言っていた通りビーフシチューだった。ただ、お母さんが張り切って作ってくれたビーフシチューは3人で食べるには少し多かった。それについて、お母さんは「今夜の分も作ったのよ」との事だった。

「それじゃあ、いただきますしよう」

「いただきます」

「いただきます」

鍋からシチューを装おうと手を伸ばすがオタマはお母さんに取られてしまった。

「エルちゃんは前に落としたでしょ？今日は落されちゃうと困るのよ」

「お、落とさないよ！前は偶々手が滑ったんだよ」

「まあまあ」

何とかその不名誉を取り消そうと頑張った。しかし、お母さんが曲げる事も無く、装ってもらおう事になった。とても悔しい。

「ぐぐぐ……、美味しい」

「フツ、それは良かったわ。…ほら、ドンドン食べて？」

「…うん」

「あー、こっちにも装いでくれると嬉しいかな？」

「あら、貴方も零してしまうのかしら？それはいけないわね、仕方ないから装いであげるわね？」

「…ごめんなさい、自分でします」

「そうだ、エルちゃん？夕食だけどロイド君も参加するわよ」

シチューを食べ終え、休んでいるとお母さんが手を拭きながら言うてきた。

「そうなんだ、じゃあガイさん仕事なんだね」

「ええ、そうね。ガイ君からはそう聞いているわ」

それを聞いて、少し残念だなあと思った。ロイドが加わるのは別に良い、食べる人が増えると美味しいから。そこにガイさんが一緒だと、事件の話を簡単な物語にして聞かせてくれる。自分や周りの人の解決して新聞に載った事件をガイさんや警察の視点から英雄談のように話してくれるのだ。自分はこう考えてたやこいつのあの時の行動はすごかったなどを身振り手振りで話してくれて、それが面白し悲しかったりするのだ。

そんな事を考えていると、お母さんが微笑みながらこちら見ていた。

「フツガイさん来なくて、つまらなそうねエルちゃん」

「少し残念だなあって思っただけだよ。ロイドもくるしつまらないなんてないよ」

「フツツそうなのね」

「……。あれ？何か勘違いされてる？」

「ねえ、何かかんー」

「さあ、夜の買い物行くわよ。」

「ちがーいーえっ、ちよつと！お母さん、マッテー！」

突然話を遮ったお母さんは、買い物袋を片手に部屋を出て行った。

その後、何度聞こうとしてものらりくらりとなかなか聞けていなかった。

「ねえ、ねえつてば。」

「はいはい、服引つ張んないの。」

「質問答えてよ！ねえつてば！」

結局買い物も終わり家に帰っても答えてくれなかった。

午後5時になりお母さんも夕食の準備をし始めた。今日はロイドもいるから沢山作るのだろう。昼の残りも有るから今日は凄く多くなりそうだな。お父さんとロイドには頑張つて貰わないと。あの後、お父さんは書齋に引きこもって何かしている。本の整理だろうか？職場の本の確認なのかも知れない、どっちにしても遊んでくれそうに

ない。姉さんは仕事で遅いからご飯も向こうで食べるそうだし。……暇だ。手伝いとかも今は良いって言われたからやることがない。日曜学校の宿題も全部終わり、次にやるところの予習も終わってしまった。外に行こうにも午後5時なので少し危ない。どうしたものか、なんて考えていた。部屋にはキッチンからのカタカタやトントンと言う音が聞こえるのみで他の音は聞こえない。とても静かだった。いつもだったら静かで良いなあとなるが、暇な時には静かなほど苛々してくるのだ。しかし、暇をつぶせる物が周りを見てもない。

「暇なあ。」

溜息と共に口から出てしまう。ソファーに寝転がりながら早く時間が経つことを願っていた。

十分が経過したが、相変わらず暇なままだった。ソファーの上でグデーとしているが暇は去ってはくれないらしく、面白そうな事は見つからなかった。

二十分が経過した頃にコンコンと扉を小突くおとが部屋に響いた。すると、キッチンからエルちゃんく出てくれない?と聞こえた。はいと返事をし扉まで走っていった。

「はい。どちら様?」

ガチャッと扉を開け外を見るとそこにはロイドがいた。

「あーって、エルか。…返事を聞いてから開けた方が良いんじゃないか?」

「何だあロイドなあ。…ご飯でしょ?今お母さんが作ってくれてるから上がった」

「ああ、そうさせて貰うけど…どうかしたか?」

「暇なの」

「……そうなのか」

僕を先頭に廊下を歩いていたがさつきからロイドの呆れたような視線が僕の背中に刺さってる。痛い、何か痛い。体より心が痛い。

「ロイド、痛い」

「どこが?」

「背中が」

「気のせいだよ」

気のせいなもんか、突き刺さってるよ。とつても。前にも同じ様な事あったからってあんまりな扱いだ思う。

「……」

「……」

「ねえ、ロイド」

「何？」

「何か面白い事を話してよ、つまんないの」

「……」

突き刺さってる物の本数が増えた気がする。

ソファーに座ってもそれは続いた。どれほど以前のことを引つ張ってるのか。以前も僕は暇に持て余していた。そこで、ロイドに暇を潰すのを協力して貰ったんだ。その時にロイドに歌を歌ってや走って来てなどどうでもいいことを頼んだのだ。ロイドは真面目だから頑張ってくれたが時間は潰れたけど暇は潰れなくて色んな事を頼んだ。だんだん難易度も上がって行って、俳句を読んでなど頼んでいた。流石のロイドも苛々したのか顔が強張っていった。僕はそれに気づかずにどんどん言った。すると、ロイドが突然大声を上げ部屋から出て行ったのだ。それから、僕が暇と言うと睨んだり呆れたりするのだ。廊下を歩く間ロイドとの会話は無く刺さる視線は増える一方だった。きまづかった。原因は自分だけど、きまづかった。しかし、それは部屋に入ると解決した。

「あら、ロイド君来たのね」

「はい、お邪魔します」

「もうすぐ出来るから部屋で待っててちょうだい」

「手伝いますよ、エルも暇してたみたいですし」

お母さんが話しかけてくれたから助かったと思ってたのに……
まあ、良いか。

「うん、手伝う」

「あら、そうなの？…それじゃあ、これを運んでくれる？」

ロイドのせいで手伝うはめになったが運んでいると時間も進むの
で助かったのかも知れない。なら良かったかな？

ロイドと僕が手伝ったからか予定より早く準備が終わった。

「それじゃあ、いただきますしようか」

「いただきます」

お母さんが今夜作ったのは昼のシチューの他に8品作っていた。
麻婆豆腐などからオムライスやクリスマスケーキなど有る。食べき
れるのだろうか？4人で食べる量ではないと思うのだけど。・・・
あつ、お父さんが顔をひきつらせた。やっぱり多いんだ。いつもはガ
イさんが片付けてくれるけど今日はいないんだよねえ。僕は小食だ
からもともと頭数には入っていない。無理するとはくの仕方ない。
ここはやっぱり食べ盛りのロイドに期待したい。そこで期待の眼差
しをロイドに向ける。三分位見ていた。けど、一向にこつちを見な
い。箸は進んでいるから良いんだけど、こつち見ないな。

「エル、こつちを見てないでもっと食べたらどうだ？」

「別に食べれるだけ食べるよ。そつちだって、もっと食べないとガイ
さんみたいに成れないよ？」

「…エル、いいかげん機嫌直してくれ、美味しいのに不味くなりそう
だ。」

「……」

そう言うが、ロイドは相変わらずこつち見ないで言うてくる。機嫌
が悪いのはそつちじゃないのかとか色々と言いたいけど、僕はロイド
寄りも大人なので此処は引いてあげる事にした。別に言葉にはしな
いけどロイドには感謝して欲しい物だまったく。

「もう、エルちゃん？何をそんなに腹を立ててるのかは分からないけ
ど、今はロイド君の言うてる事が正しいわ。ご飯の時位は機嫌を直し
てちょうだい」

「そうだね、折角のごちそうだよ。楽しく食べないともったいないよ」
「うっ、・・・わかった」

仕方ない、お母さんたちに言われたら直さないとイケなくなる。ま
あ、元をたどれば私のせいだし？……仕方ない。

「…エル」

悶々としていると、ロイドが皿を僕の前に置いた。置いたのは僕の反対に置いてあったハムサンドだ。…これくらいなら行けるかな？

「貰うよ」

ハムサンドを一口食べる。…美味しいよやっぱり。胃が小さくなかったらもつと食べるのに。

「美味しいよ、お母さん」

「それは良かったわ」

ハムサンドを食べ終わると満腹感が僕を襲ってきた。これ以上は厳しいようだ。

「お腹いっぱい」

「そう、先に休んで良いわよ？」

……………。

「いや、ここでみんなが食べ終わるの待ってる」

「…そう、ならお話でもしましょうか」

「何のお話？」

「そうね、楽しい話にしましょう」

そう言うと、お母さんは持っていた箸を机に置いた。それを見てロイドも箸を置いた。お父さんは微笑ましそうに箸を進めていた。

「…と、言っても何を話そうかしら？…そうね、帝国へ旅行に行った時のにしましょう」

少し悩んでお母さんは拳を手のひらにポンとのせ話す話を決めたようだ。

「帝国？お母さんエレボニアに行った事があったの？」

「ええ、遅れた新婚旅行だったかしら？ねえ？」

言いながらお母さんはお父さんの方を向いた。

「ん？そうだな、あの時はまだ行ってなかったしな、新婚旅行に」

「なんで行ってなかったの？」

「お父さんの仕事の関係よ」

「結婚してからしばらく職場が忙しくなってるな？落ち着いた頃には新婚って感じでは無くてな。行かなかつたのだがな、7年位前に行った

何だったかの事で行ったんだ。何だったかな？」

「なんでだったかしらね？」

思い出せないのか二人は首を捻った。

「まあ、それで行ったのよ」

「帝国のどこに行ったの？」

「帝都よ他の州はより帝都の方が知っている事が多かったものね」

「帝都ってどんな所なの？」

帝都で生まれたいらしいけど帝都がどんな所かは良く知らない。街としてとても大きいらしいけど。

「そうねえ、とても綺麗な所よ。自然って感じでは無いけど良く整備されてる綺麗な街ね」

「整備された街か……」

いままで黙って聞いていたロイドがポツリと言葉を漏らした。

「そう、とても綺麗に感じたわ」

「ああ、建物の配置にも景観などに気をつけて建てたようだった」

「そこで、いろいろと見たのよ。導力カトラムとかね」

「カトラム？」

「クロスベルで言うバスよ。これで都内をまわるのよ」

「へー、そんなのが走っているんだ！」

目を見開く位に驚いた反応をしているロイドに比べエルは目を輝かせた。

「それに乗って、マーテル公園やヘイムダル大聖堂を見たのよ」

「ヘイムダルは16街区で出来ているがどれも違う顔をしていて面白かったな」

「凄いな…街区の数だけでもどれだけ凄いのがうかがえるな」

「本当にねえ」

帝都がどれだけ大きいかを改めて実感して声が出なかった。

「アルト通りでは帝都の遊撃手協会があったな」

「帝都の遊撃手協会の仕事は大変そうだったわ。いろいろな人が出たり入ったりしてたもの。あら？エルちゃんどうしたの？」

遊撃手協会の話辺りから黙ってるエルにレイテが気がつき声をか

ける。

「エル？どうしたんだ？」

「…いや、遊撃手協会って聞いて何か引っかけたような感じから」

「エルちゃんが帝都にいたときに何かあったのかもね。あれだけ地域密着だし」

何か赤いようなものが浮かんだけど良くわからなかった。

「そういえば、私たちがアルト通りを通ってる時に小さい女の子が外に一人で出て行っちゃって、言っちゃわね」

「ああ、何でも7歳位の黒い髪に黒い目の女の子だったそうだ」

7歳の黒髪…うーん、何か引っかけかあるなあ。記憶を失う前の僕に係あるのかな？

「…：大丈夫だったの？」

「話を聞いただけだけど無事遊撃手に助けられた用だよ」

「…良かった」

「そうね、私たちが帝都に行った日に起きた事件だけど不思議な感じよね」

「なんで？」

「たまたま、聞いた話なのに新婚旅行の動機より覚えているんだもの」

「そだねえ、不思議だね」

お母さんとお父さんはお互いに笑いあった。確かに不思議な感じがする。

「その助けられた女の子はエルの友達かもな」

「なんで？」

「エルってその時は帝都に居たんだろ？」

「アルト通りね、案外そうかもね」

その後も話たり僕以外がぐい飯を食べたりと時間が過ぎていった。

「それじゃあ、ぐいちそうさまでした。」

「ええ、今度はセシルとガイ君も一緒に食べましょう」

「はい」

「それでわ、またの機会にお願いします」

「じゃーねえ、ロイド」

「ああ」

その後、姉さんとガイさんが帰って来て、部屋で談笑をした。夜の9時を回って、ロイドとガイさんは自分の家に帰って行った。

七耀歴1197年 9月10日

日曜学校にも通い始めて、しばらくが立ちました。ウエンデイとお喋りしたりと楽しんでます。ロイドとガイさんがたまたまに食卓に並びますが、いつも楽しい時間です。日曜学校自体はそんなに長くは通わないと思うけど楽しい時間です。

エル・エルフィミン

3冊目 p359 12月23日 ウルスラ・クリスマスパークティーI

秋も終わり、14歳になった僕は寒さに震えていた。

「寒い寒い寒い寒い」

「エルちゃん少し待っててね……うん、できた。はい、ミルクポタージュよ。」

温かい、12月に入って一層寒くなった気がする。雪もだいぶ積もって来て、交通にも影響を出て来るかもしれない。ますます暖房から離れられないかも知れないな。寒い寒い。

「エルちゃん、そんなに近くだとやけどするわよ。」

「離れたくない。」

「でも、やけどしたら大変よ?」

うっ……少し離れよう。暖房から少し離れ姉さんの隣に腰掛けた。寒さが離れた分増したけどやけどは怖いからね。

「外に出たくないな。」

「そうねえ、もう少し寒くなければ良いんだけどね。」

外は相変わらず雪が降っていた。

ゴロゴロとゴロゴロと身体を転がしていると頭の上から声が聞こえた。
「なにやってるだ?」

声が聞こえたが良いやと無視した。

「おい、無視するなよ。起きろって。」

また聞こえたが良いやと思つたら布団から引きずり出された。ひどい。寝転がりながら声の方に顔を向けた。ロイドの困ったような怒こったような顔があった。

「エル、昼寝も良いけど手伝ってくれないか?」

「何に?」

「昨日、セシル姉が言ってただろ？明後日に聖ウルスラ医科大学病院でクリスマスパーティーを行うから手伝ってって。」

ああつとエルは思い出した。昨日もロイドとガイが家に招かれて食事会を開かれていた。そこで、セシルからクリスマスパーティーが有るからその準備を手伝ってくれないかと提案があった。ガイとロイドは直ぐに了承したが、エルは面倒くさがって返事はしていなかった。だが、ロイドの中では了承されていたようだった。

「時間？」

「ああ、もういくぞ？」

「わかったよ。」

ささつと、支度をしてロイドと家を出た。今は16時だから16時半には着くだろう。パーティーの準備は17時から行う。昼間は看護師が集められないので人が少なくなる17時から準備が始まると、ロイドが教えてくれた。

バスに揺られて30分位、聖ウルスラ医科大学病院に到着した。定期で支払いバスを降りた。病院の方を見るとオレンジ色の空が見えた。もうすぐ時間的に日は沈むだろう。

「どこで待てば良いの？」

「受付にセシル姉の手伝いに来たって伝えれば良いらしい。」

「そうなんだ、じゃあ行こうか。」

病院入り口受付に行きセシルの名前を出すと、二階に上がるように伝えられた。

二階の受付に上がると姉さんが受付にいた。どうやら受付してくれた人が姉さんに連絡してくれたようだ。

「姉さん、開始まで少し時間があるけど、時間まで何してたら良いの？」

「そうね、なら二人ともこっちに来てくれる？」

そう言う姉さんは受付の奥に入って行った。僕達はそれについて行った。ついて行った先、そこは看護師の待機場所だった。

「二人には時間まで看護師見習いになって貰います！」

「へっ?」

「簡単な事だから大丈夫よ。」

「いや、だから——」

「エルちゃん前から興味あったでしょう?」

「そうだけど、違うよ。」

「?ならこつち来てくれる?着替えましょう。」

「姉さん(セシル姉)く!」

僕とロイドは叫んだ。この時の僕とロイドの気持ちは一緒だったと思う。しかし、姉さんは制服を取りに行き部屋におらず僕らの叫びは届かなかった……。

「うん、似合ってるわよ。二人とも。」

「うん……ありがとう。」

「ハハハ……疲れた。」

姉さんが用意した制服が小さかったり、女性用2着だったりといういろいろあり疲れていた。

「それじゃあ、行きましょう。」

「うん。」

「はい。」

姉さんについて部屋を出た。

姉さんは二階の突き当たりの病室の前に止まりドアをノックした。

「こんにちは、ノエルちゃん入るわね?」

「はい。」

部屋の中から元気そうな声が聞こえた。確認し、姉さんが入って行ったので僕達もついて行った。

「ノエルちゃん、元気かしら?」

「はい、元気です!」

元気良く敬礼のポーズで返事した。

「そう、ノエルちゃん良かったら17時から明日のパーティーの準備が始まるけど参加する?」

「あつ、行きたいです!」

「なら、17時に向かいに来るわね。」

「はい、お願いします!」

「じゃあ、また後でね。」

つと、姉さんが部屋を出たので、僕達は会釈をして続けて部屋を出た。

部屋を出て少し歩くと姉さんは話出した。

「今の子はね、ノエルちゃんって言うのよ。少し前に高い所から落ちて両脚を骨折して、今入院してるの。今は、元気だけど・・・夜には部屋で泣いてるのよ。」

「何でなの?」

「お父さんの様になりたいと、一人で特訓していたらしいの。ノエルちゃんのお父さんは、警備隊の人でお父さんに憧れて訓練をしていたそうなの。でも、三年前に亡くなったの。事故死でね。それから、ノエルちゃんはお父さんの代わりに家族を守ろうと特訓に励んでいたのだけど、一人だったから危機管理が出来なかったのだと思うわ。」

「そうなのか……。」

「クリスマスパーティーは、こういう子に元気をプレゼントするのも目的としているのよ。」

「なら、ちゃんと準備して楽しいものにしないとね。」

「ああ、もちろん。」

その後も患者の部屋を訪問した。元気に参加を希望する人や体調が優れないからと断る人など様々だったが沢山の人とお話した。最初は姉さんだけが話をしていたが、僕やロイドも会話をしたりした。世間話だったり、姉さんに習って軽い健康診断をしたりした。

「そろそろ時間ね会場に行きましようか。」

姉さんの担当する病室を回り終えたら備蓄倉庫にて備品を整理していた。姉さんが言うまで気がつかなかったが時計の針は16時58分を指していた。

「姉さん、場所は?」

「病院の敷地内にある、オーベルジュ《レクチエ》よ。」

「隣の棟ね。」

「ええ、パーティーの為に貸切にしてもらってるのよ。．．．さあ、ノエルちゃんを迎えに行きましょう。」

備品の整理に区切りをつけてノエルちゃんの病室に向かった。

「ノエルちゃん、迎えに来たわよ。」

「はい、準備して待つてました。」

「エルちゃん、あそこの車椅子を持って来てくれる？」

「あれね、わかったよ。」

車椅子を転がしノエルちゃんのベッドの横につけた。

「ロイド手伝ってくれる？」

「ああ、わかった。」

姉さんが足の方を持ち、ロイドが肩の方を持って車椅子に乗せた。

「ありがとう。」

「どういたしました、行こう。エル、セシル姉」

「ええ。」

ロイドが車椅子を押して会場に向かった。

《レクチュ》に着くと、中から話声や物を動かす音が聞こえた。

「もう、集まってる人がいるんだね。」

「この準備の時に患者さんと呼ぶのは手伝って貰うのとコミュニケーションの場にしてほしいからと言うのも有るのよ。」

「そういえばセシルさん、明日妹も呼んで良いですか？」

「ノエルちゃんの妹ね、大丈夫よ。」

ノエルちゃんは嬉しそうに顔を緩めた。建物の中には看護師の他にスリングを吊している人や松葉杖をついている人がちらほらと見えた。

パーティーの準備が始まって、集まった皆で作業を進めている。車椅子のノエルちゃんは基本的に折り紙で輪繫ぎを作って貰っている。ロイドと途中で合流したガイさんはツリーの設置を手伝い、姉さんは全体の指揮を取っていた。僕は食材を買いに百貨店に行っていた。クリスマスパーティーの料理は上手いからと言う理由で、僕がメイン

で行う事になった。だから、食材には自分でしつかり選んできた。買った物を冷蔵庫に閉まっていると頭上から声が聞こえた。

「随分と沢山買って来たなエル。」

「ん？・・・ガイさんですか。はい、食べる人が沢山いますから。」

「おお、確かにそうだな、明日はアリオスと家族も来るみたいだな。」

「そうだったんですか。なら、アリオスさんかご家族の好物って知ってますか？..」

「ん？何でだ？」

「ガイさんがいつもお世話になってるからです。」

「まあ、世話にはなってるが別にエルがしなくても良いぞ？」

「まあまあ、良いじゃないですか。」

「うーん？」

ガイさんは顎に手を当て、うーんと悩み出した。僕はその悩む用な仕草しているガイさんを手を拭きながらみていた。

「そーういやあ聞いたことなかったな。」

「わからないですか。」

「ああ、ごめんな。」

「いえ、来ると聞いて思っただけですから。」

「まあ、エルの料理は美味しいからどれも喜ぶさ。」

「そうですか？・・・ありがとうございます。」

「ああ、そんじゃあツリーとかの仕事に戻るな。」

「はい、頑張つて下さい。」

ガイさんは片手を挙げて調理場を出て行った。

「よーし、今日作れる物は作って冷凍しておきましょう。」

「それじゃあ、今日の準備はこれまでにしましょう。皆さん、お疲れ様でした。」

姉さんがそう締めくくり、今日の準備が終わった。今は午後10時でノエルちゃんや患者の皆さんは9時を過ぎた頃に病室に返された。さすがに患者を夜遅くまで手伝わす事は出来ないからだ。

「ガイさん、エルちゃん、ロイド帰りましょう。」

「ああ。」

「うん。」

「うん。」

その後、バスの最終便でクロスベルに戻った。

七耀暦1197年 12月23日

今年ももう、両手で数えられる位しかありませんが1197年を満喫したい今日この頃、明日はクリスマススイヴという事で聖ウルスラ医科大学病院でクリスマススパルティーが行われます。その準備に今日は行ったのですがまさか看護師見習いをさせられるとは思いませんでした。興味はあったので姉さんに簡単な怪我の処置を聞いた位でしたがさせられるとは夢にも思いませんでした。診察でノエルちゃんという子に出会いました。脚の怪我で入院という事だったので早く元気になって欲しいものです。準備時にノエルちゃんがロイドをチラ見してたのは何だったのでしょうか？準備にはガイさんも参加してくれてツリーの設置が早く終わったそうです。僕も何人かの看護師さんと一緒にクロスベルの百貨店に行き食材を沢山買いました。まさか、買いに行った看護師さんの中で一番料理出来るのが僕とはお母さんから習った料理の腕がこんな所で役に立つとは思わなかった。一人暮らしの時に役に立つな位に思ってたのに。今日作れるのを作り、準備がいるものは準備した。その後は他を手伝っていた。ロイドの視線が痛い。準備を終えたがこれなら良い会になりそうだ。

? 冊目 p???
? 月? 日 私と僕はー

病院からクロスベルの家に帰って来た僕は、自分の部屋に入るなりベットにジャンプで突っ込んだ。準備中は微塵も感じなかった疲労感が家に着いた途端、ドツと押し寄せて来たのだ。ベットに突っ伏した時に、着換えていない事に気づくも時既に遅く、僕は気絶した様に眠りに落ちていった。

……ここは? どこ?

微かな違和感を感じ、目覚めるとそこは真つ暗闇の中だった。物体の形は見えず、己の体を見る事も叶わず、五感の内、触覚、味覚、嗅覚が機能していない様に感じる。そして、目の前が真つ暗では視覚すら役に立たない。唯一聴覚だけは機能していた。

……。

だが、危機感は無かった。ただ、そうであると受け入れた。不思議だった。だが、僕という存在はそうであると決められているかの様に僕は受け入れていた。

……? ……何?

何処からだろうか? 耳に入って来た小さい音、ノイズも様にも感じた。次第に聞き取れるようになったそれは小さく短い打撃音だった。神経を耳に集中させて音を聞く。神経を集中させた耳はとても敏感で旺盛だった。

……! ……!

集中した耳は確かな音を拾った。先程の打撃音では無く嬉々とした女性の声だ。そして、女性の声は次第に大きくなって行った。それこそ集中も必要にならなくなる程にだ。ふと、僕は誘われるようにその声へ足を向け、前の見えない暗闇を歩き出した。

「エルちゃん、はい、クリスマスプレゼントよ! これ前から欲しがってたでしょ?」

足は止まる事無く歩き続けていた。依然として声は聞こえている。声は歩く毎に段々と大きくなっていった。そして、歩く度に辺りは明る

くなつて行つた。

「うわあー！ありがとーお母さん！私これ欲しかったんだ！このナイフ！」

辺りが先程と逆に真つ白へと成りつつあるそんな頃、前方には大小三つの人影が立っているのを見つけた。この空間で自分以外に初めて見る形に思わず笑みが零れた。此処にいるのが自分だけではないと分かると、小走りでその人影に向かって走り出した。

「えへへ、きれーだね！」

「うんうん、そんなに嬉しそうにしてくれるとプレゼントしたかいがあるわ。」

近づくと、朧げだった人影が鮮明に映るようになる。遠くからは同じように見えていた二つの影は大人の女性の形と小さい子供の形をとりだした。だが、それを認識すると、辺りの情景に靄が出始めた。突然の事に足を止めると、さっと、靄が晴れた。すると、先程は白一色だった情景ががらりと姿を変えていた。真つ白だった辺りは色取り取りの飾りの有る木質の茶色い壁に、足元は弾力のあるカーツペツトに、何も感じてい無かった肌は暖炉の熱気を感じ出した。先程の場所とは何もかもが異なるこの空間には、先程から聞こえていた声の女性と男性と小さな女の子の三人が立っていた。女性はベージュを基調とした綺麗な服を着ていた。男性は黒い服にズボンを着ていた。

そして、小さい子供は黒髪に黒い瞳で、白い小さいドレスを着ていて両手でリボンで巻いた箱を持っていた。先程からの会話を聞く限り、クリスマス会の最中のようなのだ。

「喜んで貰えて良かったよ。」

「ええ、本当にね。あつ部屋の中で振り回さないの！」

「アハハハッ♪」

子供はプレゼントして貰った小型ナイフを振り回していた。それを女性が注意するが、余り効果はない様子だった。男性はそれを見て微笑んでいた。

「もう、危ないのよエルちゃん！」

女性の呼んだ名前を聞いて、目の前の3人が誰なのかを何となく察

してしまった。だが、何でこの記憶に無い光景を見ているのかが分からなかった。

「これをもって遊んで来る！」

「気をつけてね。」

「うん、エリオットとだし大丈夫だよ！」

「エリオット君年下だよね。」

「気にしな―い。」

小さい娘は早速貰ったナイフを使いたいらしく、元気良くこつちに走ってきた。このままではぶつかると思って、避けようとしたが何故か体が動かなかった。とっさに前を見た。小さい僕は目の前で間に合いそうに無かった。僕はぶつかる！と目を瞑った。

しかし、痛みはなかった。目を開けて辺りを見たら僕の後ろいた。先程と打って変わって、悲しそうな顔をしていた。

「私は君に触れられない。」

そう言って、小さい僕は手を僕に向ける。僕は何故かその手に触れようと手を伸ばした。しかし、触れようとした僕の手は空を切った。

「……僕は君に触れられない。」

何度試しても手は空を切るのみだった。

「……」

「……」

小さい娘は手を伸ばしたまま僕を見つめて動かない。小さい娘はしばらくすると手を引き、僕の目を見て話し始めた。

「……あなたは私で、私はあなただったの。でも、私達は離れ離れになった。 の影響で。私は未来が無くて、あなたは過去が無い。ねえ私、あなたの後ろには何かがあるかしら？」

「……僕の後ろ……振り向くと変わらず暗闇が広がっていた。本来ここには僕の過去があったのだろうか？」

「あなたには見えないだろうけど、あなたの過去は私の後ろにあるわ。」

小さい娘の後ろを見た。しかし、そこは暗闇が広がっていて何も見えなかった。あそこには僕が失った物が有るのだろうか、そう思っ

無意識に僕は手を伸ばした。すると、何かに触れた。いや、触った感覚は無かった。けど、何かに触れたと感じた。何だ、これは？

「……わからない。でも、それがあるから私は未来が見えないの。ねえ、私は未来が見たいの。私をー」

僕はふいに、自分の意識が遠くなるのを感じた。すると、僕の身体はどんどん小さい娘から離れていった。僕は謎の気だるけを感じた。遠くから僕を呼ぶ声が聞こえた。なん首が少し痛くなってきた。

「エル、起きてくれ朝だ。」

気持ちの良い朝なのに、遠慮のない揺さぶりが僕を微睡みから目覚めさせた。

「……ふわあ。……ふわあ。……おはよう。」

「ああ、おはよう。それから朝ご飯は出来てるって、レイテさんが。それと、着換え置いておくから着替えろよ。」

「わかった。……ふわあ。」

ロイドはお母さんが用意したのだろう着替えを置いて部屋を出ていった。

「おはよう……。」

「アム……おはよう、眠そうねエルちゃん。」

リビングに行く姉さんはパンを食べていた。挨拶すると姉さんは食べながら挨拶した。

「あら、凄い眠そうね。エルちゃん、顔でも洗ってきたらどうかしら？」

「ああ、そうした方が良いと思うぞ。」

「……ん、そうする。」

ロイドもスクランブルエッグを食べながら言ってきた。

洗面台の鏡の前に立ち鏡に映る自分の姿を見ていた。

「……そういえば、何の夢だったかな？何か大事な事だったような気がするけど……。」

バツシャつと顔に水を当てる。

「……思い出せないなあ。」

バツシャバツシャつと顔に水を当てる。

「……まあ、良いか。」

顔をタオルで拭き、リビングに向かった。

「エルちゃん、食べ終わったら病院に向かうわよ?」

「うん、・・・アム・・・ン・・・わかった。」

朝ご飯のパンを口に運びながら僕は姉さんに頷いた。

「・・・ン・・・ちそうさま。」

朝食のパンとご飯を食べ終えて僕は一度部屋に戻り身支度を済ませた。

「・・・ふああ、あ・・・」

起きてからそんなに時間が経っていないためまだ眠い。頭に血が巡って無いのだろうかぼーとする。

「・・・ふああ。」

なんだかんだで準備を終え、リビングに戻るとロイドと姉さんが待っていた。

「あら、エルちゃん準備は終わったのね?」

「うん、終わった。」

そう言う姉さんは微笑み、ポンツと手と手を合わせ言った。

「じゃあ、行きましょうか。」

『今日は聖ウルスラ医科大学病院行きバスにご乗車ありがとうございます。只今午前9時30分です。到着予定時間は午前10時10分でございます。では、発進いたします。』

運転手のアナウンスが終わるとバスはゆっくりと動き出した。窓から見える景色がバスのスピードに合わせて流れて行く。街道に出るとバスはスピードを上げた。それに合わせて流れるスピードも速くなっていった。流れていく景色には小さい魔獣が映ったり、釣り人が竿をたらしめているのが見えたりした。何度も通る道でもちよつとした変化があると嬉しいものだ。

・・・長々言ったがバスの中は面白くないって言うことを言いたいんだ。スツゴくつままない。早く着かないかな。・・・あつ、ポムだ。光ってるよ、珍しいな。

『まもなく聖ウルスラ医科大学病院に到着いたします。お忘れ物のないようご注意ください。』

「やっとな着いたよ。」

「言っていないで準備してくれ。」

そう言っつて、ロイドは読んでいた雑誌で僕を叩いた。

ロイドは発進してから雑誌をずっと読んでいた。タイトルは『釣りの基本《上級者編》』だ。以前は《中級者編》を読んでいたが《上級者編》にグレードアップしたようだ。基本が終わったら応用《初級者編》のようだ。基本に三冊も使っているのに書くことが有るのだろうか？ 因みに一冊100ミラだ。愛読者は多いのだそうだ。

「叩かないでよ。痛いなあ」

「もう、降りるから準備してくれ。」

こいつ年上を何だと思っつてるんだらうか。身長とか見たらどっちが年上かなんて分かり切っつてるのに。」

「……口悪いぞ。」

ロイドがこっちみてるけど何だらう？

「ひとまずバス降りよう。セシル姉はもう降りてるから。……ほら」
外を見ると、姉さんがこちらに手を振っつていた。……いや、よく見たら振っつている手の反対の手で早く来いっつて合図しててる。

「……うん、行こう」

運賃を払い姉さんの所まで走っつて行っつた。

「では、予定時刻になりましたので準備を再開します。昨日の続きになります。皆さん頑張りましょう」

姉さんの開始の合図で準備が始まっつた。ロイドは昨日と一緒に机を運んだりしている。僕も昨日続きで調理をしている。昨日出来なかつつたピザやチキン何かを作っつていた。準備中は特に話すこともなく、時間はあつという間に過ぎていっつた。今は手の空いた人で参加者を迎えに行っつている。ガイさんやアリオスさん、ノエルちゃんも会場に來ている。今日の天気は快晴との事なので急遽外にも机を置いて

いる。その関係で作る量が増えたけど、その分沢山の人が参加してくれるパーティーだ、楽しくない訳が無いだろう。だからそんなに苦じゃなかった。

「皆様今日は聖ウルスラ医科大学病院クリスマスパーティーによろしくおいでくださいました。今日は存分に楽しんでください。．．．では、乾杯！」

夕方、姉さんの乾杯の合図でパーティーは始まった。パーティーではビンゴ大会などのイベントも有るけど、基本的に料理を食べて楽しく話す事を中心に行っている。患者さんが話す事で気分転換になったら良いという考えでこの形になった。僕も料理の補充をしつつパーティーに参加してる。

「おっ、エルが楽しんでるか？」

休憩の合間に歩いているとガイさんから声をかけられた。

「はい、楽しんでますよ、ガイさんはどうですか？」

「ああ、楽しんでるよ。エルの作った料理も美味しいぞ。うまくなつたな」

ガイさんは僕の頭を優しく撫でる。ガイさんにはお母さんに料理を習ってる時にロイドと一緒に試食してもらっていた。最初は調味料を間違えたりして、苦笑いばかりだった。

「はい、頑張りました」

だから、僕は少し胸を張りながら言った。それを見たガイさんがまた撫でてきたのはご愛嬌だ。その後も少し話してガイさんと別れた。

「あつ、ノエルちゃんだ」

ガイさんと別れた後も、何人かの知り合いと会話をしながら歩いていると前方にノエルちゃんが料理を食べているのを見つけた。少し気になったので、知り合いと別れてノエルちゃんに声をかけた。

「ノエルちゃん？」

「．．．はい!?!?．．．あつ、エルさん！」

突然声をかけたからかノエルちゃんは驚いて持っていた箸を落と

してしまつた。

「あれま、ごめんね。驚かせちゃつて」

「あ、いえ、えつと大丈夫です」

ノエルちゃんはそう言うが、今は僕が悪かつた。だから近くにある箸置きから新しい箸を持つてノエルちゃんの所に戻つた。

「はい、箸持つてきたよ。いやあ、ごめんね」

「すみません、ありがとうございます。……あつ、そうだ!」

ノエルちゃんは何かを思い出したのか、車椅子にかけていた鞆から小さな箱を取り出した。

「これ、クリスマスプレゼントです。お母さんに頼んで買つてきてもらいました。開けてみてください。」

そう言つて、綺麗に梱包された箱を差し出した。開けてみると、赤色の綺麗な髪留めだつた。裏面には『ERU』と彫られていた。

「うわあーありがとうございます。つけてみていい?」

「はい、付けてみてください」

そう言う事なので早速付けてみた。鏡が無いのが悔やまれるがノエルちゃんは似合つてると言つているので大丈夫だろう。まさかノエルちゃんから貰えるとは思つてなかつたからとても嬉しい。

「エルさん、髪が白いから似合うかなつて思つて今日の午前中にお母さんに頼んで買つて来てもらつたんです。そのせいで、お母さんにもつと早く言いなさいつて怒られましたけど、似合つていて良かったです」

「ありがとう、とても嬉しいよ。……そういえば、妹さんが来るつて言つてたよね、どうしたの?」

「はい、えーと……。あつ、いました」

ノエルちゃんが指差した先には、背伸びして一生懸命料理を取ろうと頑張つている女の子がいた。

「フラン!」

「?……あ、お姉ちゃん!」

ノエルちゃんの呼びかけに辺りを見回していたが、此方に気づいて走つて来るノエルちゃんの妹ちゃん。彼女の後ろで彼女の持つてた

お皿がカチャンツと音をたてて、机の上に落ちたが、此方に走って来る妹ちゃんには届かなかったようだ。

「お姉ちゃん!」

「ちよつと! フラン!」

ノエルちゃんに抱きつくが、ノエルちゃんは後ろが妹ちゃんの向こうの方が気になるようだ。仕方ない、片付けに行こう。

「:僕が片付けとくよ。」

「あつ、すみません。 . . . もう、フランったら」

「えへへ、お姉ちゃん♪」

入院してから会えていなかったようなので、とても甘えたかったのだろう。抱きつく妹をあやす姉の姿は周りの人達から微笑ましく見られていた。

「エルさん」

「ん、なに?」

「ロイドさんは一緒じゃないんですか?」

「えっ?」

あの後もノエルちゃん達との会話を楽しんでいた僕は、ノエルちゃんの質問に僕は一瞬呆けてしまった。多分、口を半開きにして固まっただけだ。

「. . . ええと、今は別行動だよ。」

「そう、ですか. . . 何処にいるのかってわかりますか?」

ノエルちゃんは眉を少し歪めて少し困った顔をして、ロイドの居場所を聞いて来た。理由とかは解らなかったが、とりあえずロイドを連れて来た方が良く僕は思った。我ながら思考の停止が早い物だと思いが、めんどくさかったのだ、考えるのが。ともかく、ロイドの居場所を捜そうと周りを見渡した。こういう場でロイドを捜すのはとても簡単だ。何故なら、ロイドはモテるからだ。学校での様子を見てもよくわかる。なので、パーティーでロイドが一人だと大抵、女性に囲まれる。年齢層は小さい子供から若い大人の女性までと幅広い。ロイドも嫌だと追い払う事はしないので、余計に女性が寄って来るの

だ。今回も恐らくは一人での行動中のはずなので、大きな集団を捜せば見つかるはずだ。

「えーと、・・・あれかな?・・・なっ!」

顔をキョロキョロさせて捜していると、一際大きい集団が目に入った。それがロイドのいる集団かと思つてよく見ると、その集団の中心にいたのはロイドではなくて、ガイさんだった。ガイさんは、若い看護師さんに囲まれていた。片手に飲み物を持って、楽しそうに話していた。忘れていた、ガイさんもガイさんで凄くモテるのだ。ロイドと良い、この兄弟は遺伝子レベルでモテるのだろうか?そんな事を考えながらつい、目的も忘れてその集団を強く見つめてしまった。ガイさんが誰と居ようと本人の自由だと思つているが、正直に言えば凄く気に入らない。姉さん以外の女性と話しているのを見てると凄くやきもきするのだ。その事を本人に言うことは無いけど、ガイさんにはそうして欲しくないと強く思う。

「どうしたんですか?」

「あつ」

「あの、大丈夫ですか?」

「うん、ごめんね。呆つとしてた。」

僕の様子を見たノエルちゃんが心配そうに声をかけてきた。その声にははつとなつて、ノエルちゃんに顔を向けた。ノエルちゃんはさつきとは違う感じの困った顔をしていた。心配させた事を謝つて、改めてロイドを捜した。

ロイドの居場所は探し始めてから、ものの数分で見つかった。やはり女性に囲まれていた。ロイドも飲み物片手に女性の話にも相づちを打っていたりと楽しんでるようだった。その光景は見慣れた物なので、特に思う事はない。本人としては友達と話す感覚何だろうが、周りから見れば女性に囲まれて楽しんでるチャラ男だ。その光景は女性の僕でも罰が当たればいいのになら思ふ程だ。

何であれロイドの居場所がわかったので、ノエルちゃんに方向を指で指さしながら教えてあげた。それを見て、ノエルちゃんはロイドの

方向に顔を向ける。すると、集団を見つけたのか固まってしまった。その様子を見て、だろうなと思いつつ、しまったとも思った。昨日の様子をみる限り、ノエルちゃんはロイドを少なからず思っていたのが何となく感じ取れていた。想いの相手が女性に囲まれて楽しんでたら、シヨックをお受けるのは当たり前だ。・・・どうしよう。ノエルちゃんに抱きついていたフランちゃんも、ノエルちゃんが固まったのを見て心配している様子だった。

「お姉ちゃん？」

「ノエルちゃん、大丈夫？」

「・・・」

呼びかけても反応は帰ってこなかった。これはとても重症だと判断できた。お門違いだけど、この状況を作った原因のロイドをとてもし恨みたくなかった。やっぱり、ロイドは一回罰が当たれば良いと思う。・・・しようがないかなあ。」

「お姉さん？」

「つ・・・フランちゃん、ノエルちゃんを見ててね」

一瞬、フランちゃんのお姉さん呼びに来るものがあったけど、フランちゃんにノエルちゃんを任せてロイドの所に向かった。

近づくくと、ロイドを囲む女性が年上ばかりなのに気づいた。その事に思わず珍しいと思った。ロイドに集まる女性は年上もいたのだが、同い年か年下が多かった印象があった。今回は大人の女性の方が子供よりも多いのは知っていた。けれども、子供がいなくて大人ばかりなのは不思議に思ったが、そこまで考えて・・・まあ、良いかと思いを完結させた。今は別に関係の無いことだから。

ロイドを囲む人の壁を小さい体を使って、下から中に入り込んだ。

「ロイド」

「つと、・・・エルか、どうかしたのか？」

「ちよつと、こっちにきて」

「えっ、ちよつとー！」

ロイドを見つけたので、話もすぐに連れ出した。ロイドは少し痛

がっていたが気にしなかった。

「えっと?」

戻って来ると、ノエルちゃんは回復したのか僕の後ろのロイドを見つめていた。ノエルちゃんの前にロイドを連れてきたが、ノエルちゃんは見つけめたままだった。

「ノエルちゃん、ロイドに用があつたんだよね?」

「・・・あつと、はい…」

やっぱりノエルちゃんに先程の元気さは感じられない。これには、状況が理解仕切れていなかったロイドも気がついたようだ。

「えっと、ロイドさん」

「あ、ああ、何かな」

「・・・クリスマスプレゼントです」

そう言つて、ノエルちゃんは赤色の包み紙にくるまれた箱を渡した。ロイドはそれに少し驚いた顔をしたが、すぐにありがとうと言つて受け取った。

「開けて良いか?」

「はい」

ロイドは包み紙を丁寧に外した。中には黒に金色の模様がかかれた箱が出てきた。箱をあけると、赤色の腕輪が入っていた。良くわからないが、タイムズに売っていた物にそういうのがあつた気がする。「今日のパーティーに誘つて貰つたお礼です。私が指定したのは色だけですが。ロイドさんには似合うんじゃないかと思つて買つてきてもらいました」

「・・・ありがとう、凄く嬉しいよ。大切にする」

「・・・はい、そう言つていただけただけでも嬉しかったです」

今日一の笑みを浮かべたノエルちゃんの顔はとても晴れ晴れとしていた。

僕は夜道を進むバスに揺られていた。クリスマスパーティーも片付けも終わって、姉さんやガイさんにロイドと一緒にバスに乗っていた。姉さんとガイさんは今日のパーティーの感想や日頃の事を話していた。ロイドは疲れたのか座席にもたれて眠っていた。ロイドの右手首にはノエルちゃんに貰った腕輪がバスの照明に煌めいていた。「・・・」

あの後、ノエルちゃんはフランちゃんとパーティーを楽しんでいたと思う。ロイドにプレゼントを渡す前の様子は見受けられなかった。ノエルちゃんに何があったのかわからない。悪い事だったかもしれないし、良いことだったかもしれない。わからないけれども、ノエルちゃんはスッキリとしていた。理由もないし、宛ても無いけどノエルちゃんにとってはあれで良かったのだろうと思っている。

バスの車内は大小様々な寝息が反響しあっていた。後10分もすれば夜でも明かりが消えない街に着く。それまでは、寝息の合唱をBGMにバスを運転しようと運転手は思った。

冬至もとうに過ぎさつた今日の日、春が訪れても可笑しくはない時期なのに外はまだ寒いままだ。それでも着る服の枚数を減らしても大丈夫なくらいは暖かいのだろう。この前までは寒いと感じていた服装も今はそうでも無くなっていた。

年が明けてから3ヶ月が経った。3ヶ月もたてば新年だとかの感傷は薄れてしまい、新しく何かをとか考えるよりも今を変わず続ける事を念頭に行動していた。まあ、新しく始めた事なんてなかったのだが……。とはいえ、新年になったら何かが変わるかもしれないなんて思っていた元日の自分も存在していた。だけでも、そんな行動力持ち合わせていないので、去年と変わらない自分の身長やロイドの説教に悩まされる日々になるのかと諦めていた。

そんな僕だけど、今年は日曜学校を卒業する年なのだ。最近忘れそうだが、僕は13歳だ。だから、卒業後の進路を決めないといけないう進学か、就職かで決めあぐねていた。お父さんとお母さんは、僕の良い方に行けばいいと言ってくれている。けれど僕にはこれと言って目指したい物が無い。ただどてきとうには決めたくは無かった。もし、上級学校に進むとしたら年齢的にまだ有余がある。その間に就職してしまいうちも有るから悩んでいる。進路もろくに決まっていない僕の状況はこんな物だ。僕の周りの状況もそう多くは変わっていないかった。

しかし、変化が乏しかったのは僕の周りだけだった。世間ではめまぐるしいほど状況が変わっていた。年末にかけて騒がれ出した誘拐事件が合った。その事件は小さい子供を対象にゼムリア大陸各地で起こっている事件で、クロスベルでも子供が攫われたと新聞に書かれていた。しかも、10年以上前に起こった誘拐事件も関係していたらしい。これの解決に当たって遊撃手は勿論の事、帝国憲兵団やリベール軍など各地の軍や組織が協力して解決に動いていた。クロスベルからも被害が出ている為、クロスベル警察も捜査に当たっているよう

で、ガイさんもとても忙しそうにしていた。朝早くに出勤して、夜遅くに戻ってくる。そして、職場で夜を明かす事も増えていた。だからか、家の食卓にはロイドの姿が在る。ガイさんが家に帰れない事も有るのにロイドだけにするのは危険だし寂しいだろうと暫く家で預かる事にしたのだ。ガイさんに心配を掛けたくないロイドもお父さん達に「ありがとうございます、これからお願いします。」と言っていた。

ロイドを預かってから暫くたった頃、新聞で事件の概要が発表された。その新聞の記事から分かる事で目に付く物は、事件は大陸各地で活動している謎の教団が起こした物だという事、そして被害にあつた子供達の多くが助からなかった事の二つだ。その教団は各地にロτζジを持っていてそこで恐ろしい儀式を行っていたと書いてあつた。内容は詳しくは書かれていなかった。けれども誘拐された子供たちはその儀式の生贄にされたのだと書かれている。教団は多くの勢力が動いた事で壊滅したが、教団から抵抗も激しく多くの負傷者や死傷者を出した。クロスベル近くのロτζジでも多くの負傷者を出していた。負傷者は各地の医療機関に運ばれた。そして、聖ウルスラ医科大学にも多くの負傷者が運ばれていた。運ばれてくる負傷者の数が多く姉さんも向こうに泊まり込みで働いている。僕とロイドは何度も手伝いに行っていた。

大きな波を越したのは教団壊滅から2カ月が経つた頃だった。

「エルちゃん、倉庫から替えの包帯を取って来てくれないかしら?」

「うん、どれくらい持ってくればいい?」

「そうね、とりあえず3ロール位かしら。」

「3ロールね、了解。」

そう返事をして、廊下の方へ足を向けた。目的地の倉庫は2階にあるので、3階の此処からは少し時間が掛かる。別に緊急という訳では無いけど、少し早足で廊下を進む。途中に看護婦とすれ違うが、彼女たちに焦りは感じない。少し前までは、それは酷かったので何だか感慨深い。負傷者が運ばれて来た当初はその数にベッドが足りず、簡易ベッドや敷物の上に寝かせていた。更に人手が圧倒的に足りず休日出勤の看護師や医者がいても足りていなかった。僕やロイドも手

伝ったが、本格的な事は出来ないで助けにはなれなかった。負傷者はほとんど運び込まれるが他所からの応援やレミアアからの応援に頼って捌いて行った。1か月もすればある程度落ち着きも出て来る物だろうけどまだまだ落ち着けなかった。人手不足からの超過労働で倒れる看護師や医者も少なくなかった。本当に落ち着いたのはつい最近の事だった。その頃にはガイさん達の方も後処理なども終わり始めていた。元の状態には戻れないが、それに近い状態に徐々に戻り始めていた。

「えーと、包帯包帯はつと…」

倉庫までたどり着いた僕は、畳める脚立を片手に包帯の保管場所を探していた。今回の件で大量に物資を届けられた医科大学は、従来の保管場所では入りきらないと判断して、今まであまり利用してこなかった少し広い部屋を新たな保管場所にした。そこに、包帯を始め、メスなどの道具類も保管されている。送られて来た物資は部屋を広くした位では収まりきらないので、天井ギリギリまで物が入れられている。そのせいで背が小さいと物が取れなくてとても困るのだ。そんな愚痴を聞いた姉さんが用意したのが僕の右腕に在る畳める脚立だ。これのお陰で取りに来る度に近くの大人に頼らなくて済むのだ。小さくてもプライドがある方の僕にとっては嬉しい事だった。その代わりに姉さんからの雑用が増えたのは余計な事だったけれども。

「よいつ…しよつとー」

脚立に乗ってもギリギリな僕は、必死に手を伸ばして包帯の箱を手繰り寄せた。少しふらつきながら箱を床に置き、中身を探り始める。整頓された包帯の幅を崩さない様に上から3つ取り出す。そして、元の場所に箱を戻す。荷物が増えた事により、少しのやり辛さを誤魔化しながら部屋を後にした。

「はあ…最近こんなのばかりしてる気がするよ。簡単な処置が出来る位に成ったら少しはわかるんだろうけどなあ。独学じゃなあ、出来る気がしないんだよねえ。」

ブツブツと小言を言いながら歩いていると、前方から綺麗な女性の人が歩いて来た。

「こんにちは」

「あら、こんにちは。貴方は看護師さんかしら？」

「えっと、見習いです。」

「あら、そうなの？…まあ、見習いさんでも良いでしょう。ちよつと頼みごとをしても良いかしら？」

「えっ、えくと…。」

「…ああ、今仕事なのかしら、それだったら違う人に頼むのだけど。」

「え、あつと、内容次第ですけど大丈夫です。」

「そう、303病室の場所を聞きたいのよ。」

「あ、それなら大丈夫ですよ。僕の目的地と近いですから。」

姉さんのいる病室は304なので隣の病室という事になる。それ位なら別に急ぎでは無いはずだから案内は可能だった。

「ならお願いするわ。」

「ええ、こつちです。」

階段の方へ体を向けながら案内を始めた。とは言ってもそんなに距離が有る訳では無いので、目的地にはあまり時間が掛からなかった。305と書かれた病室の前で女性の人は別れた。女性が部屋に入る時にかすかに聞こえた鈴の音がやけに耳に残った。

「そういうえば、名前を聞いて無かったな。…まあ、また今度で良いか。なんかまた会える気がするし。それよりも、早く姉さんの所に行かないと。」

あの後、遅かったわねと姉さんに言われたので、案内をしていたと言つて誤魔化した。

「エルちゃん、そろそろ時間になるわ。」

「え、…ああ、もうそんな時間か。うん、着替えて来るね。」

「ついでにロイドの方にも声を掛けてきて挙げて。まだ、荷物整理していると思うから。」

「うん、倉庫だよ。わかった、それじゃあ姉さんまた後でね。」

「ええ。」

姉さんに言われるまで帰りのバスの時間が近づいているのに気が

つかなかった。そこまで熱中していた訳では無かったはずなんだけどな。何だかんだ言つて、手伝いでも嬉しいからなのかな？患者さんは辛そうで余り見たい物じゃないけど、患者さんからの感謝の気持ちは素直に嬉しいから時間を忘れちゃったのかも知れない。最近はこの機会が多いから余計にそう感じるのかも知れない。そう思うと、自然と笑みを浮かべてしまう。最近はこのように笑みを浮かべる事が増えた為か、「最近のエルちゃんは別人くらい笑うようになったよね」と陰で言われてしまっていた。こう言われると素直に喜ぶのに抵抗があつて、余り嬉しくないのだ。言っている側からしたら思つた事を言っているだけで、それ以外の理由がないのは良く分かるんだけど、何かむず痒い感じなのだ。だから言われると苦笑いで返していた。自分の整理が付けば早いんだけど、どうすればいいのだろうか。そう対策を考えていたら僕を呼ぶ声に気が付かなかった。

「エル？おーい……気づいてないのか？エルー！」

呼んでいたのはロイドだった。気づかずに歩き続ける僕をロイドは肩を揺らして止める。「エル」

「ん、ロイド？どうかしたの？」

「さっきから呼んでただけど。エルが全然反応しないから心配したけどその様子じゃあ大丈夫そうだな。」

「呼んでたの？ごめん、まったく気が付かなかった。」

「ああ、気を付けてくれ。エルは最近、考え込んでるのか危なっかしいから。」

「そうかも、気を付ける。あ、ロイド。もうすぐ帰りのバスの時間。」
「ああ、エルも早く着替えて来てくれ。セシル姉はもう着替えて来たようだし。」

ロイドは受付カウンターの方を見ながら言ってきた。僕もカウンターに目を向けると、そこにはニコニコしながらこちらに手を振る姉さんが立っていた。

「エルちゃんが余りにも難しい顔をしてたから声をかけ辛かったのよ。だから、ロイドに頼んだのよ。エルちゃんが難しい顔をしている時はロイドの方が得意だから。」

「セシル姉、別に得意じゃないから。」

「でも、ちゃんとエルちゃんは気が付いたじゃない。ロイドに任せて良かったわ。」

「いや、そうだけでも。…はあ。」

「ふふ、とりあえずエルちゃんは着替えてらっしゃい。」

「……うん、ちよつと持つてて。」

此処で騒いでも仕方ない。それが僕が下した判断だった。切り替えが完了してからの行動は早かった。姉さん達を待たせる訳にならないので、駆け足で2階の更衣室に向かうのだった。

「二人とも今日も手伝ってくれてありがとう。貴方達のお陰で病院全体が円滑に回り始めているわ。あの時貴方達が手伝うと言ってくれなかつたら、私もこうしてバスに乗って帰れていなかつたわ。本当にありがとう。」

クロスベル市に向かうバスの中、姉さんは僕達に感謝と共に頭を下げた。僕達はその姿を視て啞然としてしまった。手伝いを行ったのは、姉さん達が大変そうだから暇している僕達で手伝いに行こうよみたいに軽い気持ちだったからだ。

「セ、セシル姉、頭を上げてくれ。俺達はそんなに感謝される手伝いは出来てないし、感謝されたくて手伝った訳じゃ無いんだ。なあ？」

「うん、そうだよ姉さん。そんなに感謝されたら逆に困っちゃうよ。」
「いいえ、貴方達はきちんと感謝されるべき事をしているわ。何もかもが足りていない状況に来てくれた貴方達は、あの時に最も必要だった事をしてくれたわ。あの時は、何より人手が足りてなかつた。雪崩れ込むように運ばれて来る患者を診る事も判別する事も出来ていなかった。しかも、他の病院も同じ状況だから応援を呼ぶ事も出来なかつたの。だから、貴方達が来てくれた時はとても嬉しかったのよ。だから、私の感謝の気持ちを受け取ってくれないかしら？」

姉さんは言い切った後、此方の言葉を待つように此方を見ていた。でも、僕とロイドは姉さんを見つめる事しか出来なかつた。姉さんの感謝が僕達の想像よりも遥かに重かつたのだ。その重さに僕達は耐え切れなかつた、だから言葉も出ずにただ姉さんを見つめるしか出来

なかつた。そんな僕達を見た、姉さんの困ったような顔がこの場の雰
囲気を物語っていた。

大陸各地を騒がせたあの事件から一か月が経った。一か月が経って各地も元の様な生活に戻り始めていた。事件解決に動いていた警察や遊撃手も事後は現場の調査や処理で慌ただしかったが、今では通常業務を再開させて各地を走り回っている。聖ウルスラ医科大学病院では、送られてきた負傷者の処置が完了し、回復を待つ状態へ移行した。それに合わせて通常の業務体制に戻して行った。それに合わせて僕達の手伝いも終わって、僕達も日常に戻って行った。

「ねえ、エルちゃん？最近はお手伝いでゆっくり出来てなかったと思うけれど勉強はしているのかしら？」

「大丈夫だよ、空いた時間に病院の皆にロイドと一緒に教えて貰っていたから」

「あら、そうだったの？…なら、大丈夫そうね」

病院の方も落ちついて来た事で、久しぶりに帰宅して来た姉さんは何処か疲れたような顔をしていたけど、無事に済んで安心したような雰囲気も感じた。久しぶりに皆揃っての夕食はいつもより力が入った出来栄えだった。夕食後、姉さんはソファに座って休んでいた僕に先の内容の事を言ってきたのだ。どうも、姉さんは僕が病院の手伝いばかりしていたのを気にしていたみたいだ。でも、あの手伝いの間は空いた時間に看護師長が僕達の勉強を教えてくれていた。そのお陰か、僕もロイドも勉強が疎かになる事は無かった。

「…どうかしたの？」

「ふふ、エルちゃん達が頑張ってくれたお陰で私達もとても助かったからそのお礼を皆で考えたのよ。そこで、ロイド君も連れて旅行に行って来たらどうかってなったのよ」

「旅行？」

「ええ、旅行。お金なんかは病院側が出して挙げるから行って来たらどうかしら？」

「えっ、そう、なんだ。……ん、姉さんは行かないの？」

「残念なんだけど、仕事の関係上そんなに離れる事が出来ないのよね」

「…ガイさんも?」

「そうね、貴方達二人でになると思うわ。ガイもまだ忙しいみたいだから」

急に決まったロイドとの旅行は、僕の故郷エレボニア帝国へ3泊4日の旅になった。あの後、ロイドに急いで連絡したのは内緒である。更に、ロイドから心配された。何でだろう。

そして、旅行当日になった。いつもの様にロイドに起こされ、身支度と朝ご飯を済ませた。その後、荷物のチェックを行って、ロイドと共に両親と姉さんに見送られながら僕は少し重たい荷物を持ってアパートを後にした。朝の街並みを横目に駅へ向かった。少し早かったのか、列車到着までに少し時間が空いてしまった。仕方ないのでベンチに座り、時間を潰す事になった。何となしに帝国のパンフレットを見てみたり、辺りへ目を動かしたりしていた。すると、列車の到着を伝えるアナウンスが聞こえ、帝国方面からの列車がホームに停車した。これから共和国の方に行くのだろう。そう考えていると、何故か不快に感じ始めた。列車に対してではない感じだが、その正体がすぐに浮かんでこなかった。しばらくそれを感じていると、突然それが消えてしまった。突然の事だったので、僕はつい辺りを見回してしまった。それをみてロイドがどうかしたのかと聞いて来たのはどうでも良い事だった。なぜ消えたのか、それが分からずさつきとは違う感じで悶々としてきた。そして、最初の悩みを僕は鈴の音と共に忘れてしまった。そんな僕を尻目にロイドは顎に手を当てて、冊子を見つめていた。

「ねえ、何処か良い所は有ったの?」

「ん、そうだな。あるにはあるが時間が有るのかは分からないかな。帝都は広いらしいからな」

「お母さん達も言ってたもんね」

帝都ヘイムダルは、エレボニア帝国の首都だけあってその広さは

とても広大だ。十何区に分けられた地区は一日で全部を回るのほども骨が折れそうだとお母さん達に言われていた。だからロイドはその中からピックアップしたのだろうがそれでも回れるか怪しいようだ。帝都では帝都の遊撃手に案内を依頼しているからその遊撃手に任せてしまうのも手かもしれないとは姉さんの言葉だ。ガイさんもそれが良いと言っていた。僕もその気でいたのだが、ロイドはそれでも自分が行きたいところは決めておきたい様だった。何だかんだロイドも楽しみなのだろう、最近ロイドが年下だという事を忘れそうになるけどこういう所はそれっぽいなと微笑ましく感じた。

どれくらい待たせようか？長く感じた待ち時間は列車が来た事を伝えるアナウンスにより終わりを迎えた。それを聞いた僕は周りに置いていた荷物を集め出した。ベンチに置いていた物や下に入れていた物を急いで手に持った。ロイドも持っていた冊子を上着のポケットにしまい込んで、同じように荷物を掴んで行った。最後に確認を行って僕らは列車に向かった。

「見てよ、ロイド！ガレリア要塞がもうあんなに先に見えるよ」

「エル、あんまり席を立たないでくれ。周りに迷惑だから。」

列車に乗って大分時間が経ち、僕らに乗せた列車はガレリア要塞を超えてエレボニア帝国の地を走っていた。

『「帝都へイムダル、帝都へイムダル、御降車するお客様は忘れ物にご注意下さい。次は――」』

「エル、降りるぞ。準備はできてるか？」

「大丈夫だよ。ロイドこそ忘れ物をしないですよ？」

「…エルじゃあるまいし、大丈夫だよ。」

「あるまいしとか、余計な事を言わなくて良いよ。」

軽口を言いながら僕達は、ヘイムダル中央駅を歩いた。現地ガイドはヴァンクール大通りへの入口にしていると聞いているのでそこに向かう。でも、始めて来る所で、更にとても大きい所だから僕もロイドも視線があつちこつちに泳いでいる。

「ロイド、そう言えばガイドの名前ってどんな？」

「…セシル姉から聞いてないのか？」

「うん、帝都ではロイドに任せなさいって言われているから。」

「……それで良いんだ。……遊撃手、アルベルト・ガーランドさんって、人だね。叔父さんが前話していた帝都で街道に出た少女を確保したって言っていた人だよ。ガイドの件もこういう繋がりを受けてくれたのかもな。」

「へー、でもそれって、7年前だよ。相手さん良く覚えてたね。」

「そうだな、アルベルトさんが覚えていたのは偶々かもしれないな。」
アルベルト・ガーランドねえ、特に記憶に引つかかる物は無いかなあ。対面してそうなんだけどなあ。

そんなこんなで中央駅の出入口付近までやって来た。話によればこここの辺りにいるみたいだけど、何処だろう？遊撃手って、決まった制服とかないからわからないんだよなあ。あ、でも、大荷物は持つて無いか。なら、身軽そうな人を探せば良いんだね。身軽、身軽つと。あれは車掌さん、あれも車掌さん、あれはカップル、あれもカップル、あれもカップル、カップルばっかじゃないか。遊撃手の人、見つからないよ。

「ねえ、ロイド、遊撃手の人見つけられた？」

「……ああ、おそらく。」

「そっかー、見つけられたかー。……本当につ!!え、どこ!?!さっぱりなんだけど!?!」

「後ろだよ。」

「おっと、正解だ。坊主、なかなか良い目をしてるな。」

ロイドが自身の後ろへ振り向きながら告げる。僕もそれに続き視線を動かすと、そこには片手を上げこちらを微笑む髭のおじさんがそこにいた。

「なっ、髭!?!」

「おいおい、開口一番に髭かよ?相変わらず元気なものだよ、エル坊はよ。」

「あーえっと、エル、この人がさつき言った遊撃手さんだ。」

「この髭が!？」

「何だ、心配して損したか坊主よお？」

「…これは俺も予想外です。…よくわかりませんが、印象深かった、とかですか。」

「複雑だなあ。」

「髭!？」

その後、エルの錯乱はアルベルトの拳骨で収まった。

七耀歴1198年 4月17日 (代筆：ロイド)

以前の病院での手伝いから大分時間が経った。セシル姉はもう大丈夫と言っているが、それでも他の人や兄貴の様子を見るに以前の様に戻るにはもう少し時間があるような気がする。とはいえ、セシル姉の笑顔が見れる位に回復している。今はそれで良いのだと、俺はそう思っている。兄貴も同じような事を叔父さんと話していた。

今日は、朝早くから列車に揺られていた。先日セシル姉から打診されていた慰安旅行の様な物でエレボニア帝国に向かっている。最近、憂鬱そうな雰囲気を感じていたエルを元気づけようと言うのが目的だ。何かに影響されたのか、エルはこの所元気が無かった。俺もそれは知っていたし、セシル姉や叔父さん達もわかった。ただ、原因はわからなかった。

だから、旅行に行つて元気づけようと、セシル姉が発案し、計画を立てた。最初は、セシル姉達も一緒にだったが、予定が合わせられず悩んでいた。俺とエルでは危ないとも感じていたから余計に悩んでいたと思う。そこで、叔父さんが遊撃手に頼ろうと言い、クロスベル支部に相談した。そこからは早かった。帝都で活動している遊撃手に連絡が行き、あちらで協議され、案内をつけてくれる事が決まった。セシル姉が計画を進めていたが、俺も案内してくれる遊撃手と連絡を取り合ったりしていた。

エルがこの旅行を知ったのは、大部分が決まってからだった。伝え

た時は呆然と聞いていたが、荷物を準備している時に理解追いついたのか、大声を出して驚いていた。

朝の5時頃、帝国行の列車に乗った。朝が早かったからかエルは、眠そうにしていた。けれど、心配していた事が起こる気配がなくて俺はホッとしていた。エルは列車での事故で行方不明になった。それで、もしかしたら列車に乗って発作でも起こったら旅行どころでは無くなってしまう。セシル姉もそれを危惧していた。だから、対策も用意したが杞憂で終わりそうだった。

列車内は、朝早くに乗ったので乗客は少なかった。エルも外の景色に一喜一憂しながら楽しそうにしていた。

駅に到着した俺達は、帝国という物の大きさを感じとった。クロスベルとは比べ物にならない程の巨大な駅内に、そこを行き交う人々の多さに圧倒された。これが大国か、とは何方から漏れた言葉か。

その後、案内をしてくれる遊撃手と合流した。その時のエルの反応に俺は驚いたが、遊撃手アルベルトさんは懐かしむ様に髭を撫でていた。

一騒ぎを起こした僕に髭が拳骨を落としてから少し立つ。とりあえず、3人で近くのベンチに座って休憩していた。

「エル坊、落ち着いたか？」

「…うん、落ち着いた。…髭なんだよね？」

「そうだな、立派な髭だろう？」

ポツリ、ポツリと目の前の男の事が頭に浮かんで来る。確かめる様に男を眺める。男はニヤリと髭を撫でる。

「エル、アルベルトさんの事思い出したのか？」

「…臍げに、かな？でも、髭の拳骨は何回か受けた事が有るかも。」

「ふむ、ならば後何発か落としくか？」

「…！…何か震えて来た。」

「…記憶に無くても、覚えているようだな。」

「そうみたい、ですネ。」

アルベルトの提案に体から強い拒絶反応を感じた。覚えてはいないが、余程喰らいたくないのだろう。それを見た二人は、小さな発見に頷きあっていた。

「まあ、記憶に関しては徐々に触れば良いだろう。今は、旅行の目的を果たすでしょう。」

「…目的って、何かあった？」

「ああ、帝都の観光。エルの記憶も目的だけど、旅行を楽しむのが一番の目的だよ。」

「俺の依頼もお前さん達の案内だしな。そういえば、ロイドは帝都は初めてか？」

「いえ、一度帝都には来た事があります。…小さい頃ですけど。」

「ほうほう、なら最近出来た施設とかを中心に回るとするか。」

アルベルトはそう言って、髭を撫でながらルートを考え出した。その間、エルとロイドは再び駅へと視線を向けた。昼には少し早い時間だからか、人の通りは疎らだった。この時間の場合はクロスベルの方

が人の通りが多いのかもしれない。そんな事を考えながら辺りを眺めていた。：いや、よく見たら向こうの方は人通りが多かった。僕達が座っている此処は、人通りが少ない所に設置してあるベンチの様だった。もしかしたら、髭が気を遣って此処に案内したのかも。そう思うと：いや、そんな事は無いか、だって髭だし。昔は僕が迷子の髭を探してたくらいだし、そんな気を遣うなんて出来ないはずだ。

「はあ、こいつはさつきから呆けてばつかだなあ。」

「はい、良くやる行動なんですけど、話が進みませんね。：アルベルトさんに此処を案内して貰って助かりました。」

「ああ、こいつの癖は昔から出しな。たくつ、そこは変わって欲しかったよ。」

「はは、それがエル、なんででしょうね。」

そんな二人の会話はエルの耳には残念ながら届く事は無かった。二人の視線はエルに向くが、エルの視線は虚空に向けられていた。その視線が交わるのはもう少し先の話だろう。今回は短縮しますが。

「ハッ！ヒゲエエ!!：ん?」

「エル、うるさいぞ。」

「痛いよロイド、暴力反対だって姉さんも言ってたよ。」

「そろそろお昼になるから何か食べるって、聞こうと思ったけど、エルは何も食べなくて良いんだな?」

「ごめんなさい」

「ハッハハ、あのエル坊をこんなに尻に引いたあ坊主もやるなあ。」

突然立ち上がったエルにロイドは容赦なく拳骨を落とす。それを受けたエルはセシルの名を出してロイドに訴えるが、ロイドはそれどころ吹く風と反撃を行う。昼食を人質に取られてしまえば、エルに反抗すると言う意志は直ぐに消えてしまった。その光景は、昔のエルを知るアルベルトには驚愕であり、面白可笑しくもあった。

「いい加減話を進めるか?」

「うん、髭ごめん」

「お願いします」

「さて、帝都の案内についてなんだが、お前さんから希望はあるんか？」
一段落した後、アルベルトはそう言ってエル達に問いかけた。

帝都の事に関しては、この旅が決まってから調べ直したり、お母さん達に話を聞いたりしていた。とは言っても案内役に任せられる事もあって、簡単な事しか決めていなかった。その中で行きたい場所として、劇場とマーテル公園を考えていたのでその事を伝えた。

「劇場と公園な、じゃあ、そこをルートに入れてと。：よし、早速案内するが良いか？」

「うん、大丈夫」

「よろしくお願いします」

返事を聞いたアルベルトは出口に向かって歩き出した。2人もそれに続いて出口に向かう。駅を出た3人は導力カトラムに乗り込み、帝都北東に位置するマーテル公園に向った。

「そういえば、ロイドはなんで公園に行きたかったの？」

「いや、パンフレットに書いてあったからだけど」

「えー、何か無いの？」

「：強いて言えば、屋内庭園かな。クロスベルでは見られないから」

「ああ、クロスベルじゃあ無いねえ。ミシユラムにも確か無いよね」

「クロスベルにか、彼処は敷地の問題も有るから建てようにも難しいだろうな」

「髭、クロスベルに詳しいね」

「遊撃手だからな」

そういう髭は自分の髭を撫でる。髭でも遊撃手だから隣国の情報とかを調べている様で、ウルスラ病院に多くの患者が運ばれた事も知っていた。遊撃手の知識はクロスベルのエオリアさんが教えてくれた事でも十分わかるが、髭も当てはまるとは思わなかった。髭だし。

その後もカトラムに揺られながら話しあっていた。髭の仕事振りや僕のクロスベルでの暮らし等を話した。髭が興味深そうに聞くの

で、少し恥ずかしかった。そうして、カトラムは目的駅に到着した。「さて、屋内庭園へクリスタルガーデン」に向かうか、まあ、此処から見えるけどな」

「あれだね、本当にガラス張りなんだね」

「ああ、だからクリスタルガーデンだな」

「皇族の方も来る庭園か？」

「ロイドは昔来た時は此処に来たの？」

「いや、時間が無かったから来てないはず」

「そうだったか、なら良く見て行きな。俺は良く解らんから解説とかは出来んがな」

「役立たづ」

「うるさい」

そんなこんなで庭園を見て廻る。僕も髭の事は言えない位良さなんか解らないけど、ロイドは解るのか良く観察していた。それだけでも来たかいが有ると言う物だ。

1週した所でロイドが満足したそうだから庭園を後にした。次はドライケルス広場に一度戻り、そこからガルニ工地区に向かう事になった。

「昼御飯もそろそろ考えるか」

「レストラン行こう！」

「出店とかも有るみたいだな」

「まあ、その時考えるか……ん？」

「どうしたの急に立ち止まって？」

立ち止まったアルベルトは公園の一角に目を向けた。エルとロイドも続く様に目を向ける。そこには楽器を抱えた男女が集まっていた。

「ああ、いや、音楽院の生徒達だなって思ってたな」

「ふーん、楽器を引きに来てるの？」

「おそろくな、そういえばエル、お前はエリオットを覚えているか？」

「えっ？……ん、なんか引つかかる」

「エル、大丈夫か？」

「……まあ、今はそれで良い」

そう言つて、髭は歩き出した。明らかに落ち込んだ様子の髭だが、その事をつつ込む気だつたけどその前にカトラムが来たので後廻しになつた。

七耀歴1198年 4月17日

何故かロイドの字で書かれた文章が有るが、気にせず続きとして書く。髭、アルベルトとの合流は僕に多大な影響を与えた。記憶を無くして苦しい事は少なかったけど、髭を見ると覚えは無いけど懐かしい記憶が頭に浮かんだ。髭に叩かれた事、髭に叩かれた事、髭に叩かれた事。叩かれ過ぎでは？原因は、思い出せる中で僕のも合つたけど、他の子共のもあつた。髭は慣れた手付きで僕を叩くけど、撫でる事もあつた。みたい。霧がかかつてるけど有るのは解る。どんな時だったのか気になるが晴れる事は無さそうだった。

カトラムから見た帝都の景色は、新鮮な気持ちもあつたが、少し古い建物には懐かしい気持ちが出てくる。小さい時に見た朧げな感じを町並みから感じるのだ。まあ、僕が此処にいたのは10年も前じゃ無いけどね。

クリスタルガーデンは正直に言つて退屈だった。クロスベルでも綺麗な物は綺麗だけど、それ以上に感じる事は無かつた。別に否定やなんやを言いたい訳じゃ無いけど興味が無かつた。まあ、僕こっちじゃ外を駆けてみたいだし、昔からだったのだろう。髭もロイドもわかつてたのか、良く見ていた割に足早に進んでたし。

髭があるとき質問した事は、簡単に言つたけどそれからずっと尾を引いていた。大切なんだろうって無い記憶でも解る。エリオット、人の名前だよ。もし、これを見返してたら追記しといて、未来の僕。追記 エリオットは私の大事な弟分。忘れた後悔はいっぱいした。この記憶、キアにだつてお姉ちゃんにだつてもう介入させない。

? 冊目 p???
4月17日 エリオットくん

マーテル公園を後にした僕達は、カトラムに揺られドライケルス広場を越えて、ガルニエ地区へ足を運んだ。此処は最初に行こうと予定していた劇場が有る地区だ。とは言え、劇場で公演は見ずに雰囲気を感じただけだけだ。クロスベルのアルカンシエルと比べてみたかったって、言うのもある。さらに、髭の話によれば出店も有るそう。昼に近づく空きっ腹に良い刺激をくれるだろう。

「ねえ、髭ー屋台で美味しそうな何が有るの?」

「あー、行って見ないとわからんな。何があったか…」

「エル、あまりカトラム内で動かないでくれ、揺れているし危ないぞ」「そうだぞ、エル坊は落ち着きがないからな」

「髭、うるさい」

背が低いからか、ロイドに肩を掴まれた状態で僕はカトラムに揺られていた。癪な事に背ではロイドに完敗していた。初見さんがいればロイドの方が年上だと思われる事だろう。姉さんから背が伸びる方法を聞いて実践しているのに何故なんだ。そんな悶々と考えている内に目的地に到着すつのだった。

「さつ、ようやくと着いたな、ガルニエ地区だ。劇場は向こうだな、すぐ行くか?」

「そうですね、中を見るわけでは無いですし、先に行ってしましましょう」

「賛成」

「じゃあ、出発出発だ」

案内役のアルベルトを先頭にエルとロイドは歩き出した。劇場までのそれ程遠く無い道でも、物珍しい建物にオブジェ、そして、屋台から香る甘い匂いにエルが釣れない訳が無かった。劇場に着く頃にはエルの両手にクレープやら食べ物握られており、共に歩く二人の視線から顔を反らして頬張っていた。不思議と良く食べたエネルギーはエルの何処に向かうのか、誰も気にしない?不思議が1つ増えたのだった。

なんやかんやと劇場前にたどり着く。

「着いたな、此処が帝都歌劇場へオペラハウスだ」

「おおー、劇場つてだけあって大きいねえ」

「エル坊は小せいからな、余計にそう思うんじゃないか？」

「失礼な！僕じゃ無くても大きいでしょ！」

「ハツハツハツ、そうかもな。：ロイドは何やってんだ？クリスタルガーデンでもメモを取ってたが」

「いえ、クロスベルの友人に土産話をする約束でして、本当は絵なんかの方が良いのですが、生憎絵心は無くて」

「まあ、口頭でも知らない事は楽しいさ」

メモを取るロイドを待ちながら、僕は手に持ったクレープを頬張りつつ、隣で物欲しそうに見てくる髭の足を踏んづけてロイドを待っていた。

「：よし、ごめん待たせた」

「なら、次はどうするか、まずは昼食か？」

「モクモク、うん、お腹すいた」

「：エル坊よお、お前、今食ってたクレープは何なんだよ？」

「レストランのお冷」

「アルベルトさん、クロスベルではこれが普通でした。エルが来た頃は、少なかったのですが、いつからか外れて食べる様になったんです。最初は皆喜んだのですが、次第に多くなって…」

「：ハア…昼食にするか」

本人は特に何も思っただけだが、食べてるクレープは飲み物では無いはずだ。エルの食欲にアルベルトは呆れた様に静かに溜息をこぼすのだった。

「何処で食べるの？」

「そうだな、とりあえずアルト通りの方面に向かってだな」

「エル、その前に口の周りを拭いてくれ」

「ん、良し！行こう！」

昼食を探しにカトラムではなく徒歩で散策して行く。途中、（主にエルが）ウィンドショッピングを楽しみ。（エルが）屋台で串を買い食

べ歩いた。そして、エルの嗅覚が美味しそうな匂いを嗅ぎ、レストラ
ンで食事をした。

「……アルト通りに着いたぞ、やっとな」

「おお、結構掛かったね」

「…そうだな」

アルト通りに着いたのは真昼を過ぎた辺だった。寄り道が多く予
定よりも掛かってしまった。

「あつ、アルベルトさんやつと来たのね」

「ああ、フィオナちゃんすまん、遅れてしまった」

「いえ、それは良いんですけど…エルちゃん」

「えっど？」

「…うん、何でも無いわ。そうね、…初めましてフィオナ・クレイグ
です。エルちゃん、貴方の事はロイド君やアルベルトさんから聞いて
るは」

「は、はじめまして…？エル・エルフィンで、です」

「…うん、アルベルトさんにロイド君、家でお茶にしませんか？」

「はい、お願いします」

「ああ」

そう言つて、フィオナさんは僕達を家に招いた。

「さて、エルちゃんとロイド君はハーブティーは大丈夫かしら？」

「は、はい」

「いただきます」

「アルベルトさんは水でしたね」

「待つて、俺もハーブティー下さい」

フィオナさんはフツツと微笑んでキッチンに向つた。その間、僕は
準備しているフィオナさんを見つめていた。フィオナさんの反応か
ら昔の僕を知っているのだろう。…思い出せない。やっぱり、霞がか
かっている。フィオナさんの名前は引つかかるのに、顔が全然浮かんで
こない。

「さあ、いただきますでしょうか。お菓子もありますから二人共遠慮は要
らないわ」

人数分のカップに色とりどりのカルテットアイスが並べられ、いた
だく事になった。

「はい、いただきます」

「…おいしい」

「…フフ、そう、それは良かったわ。口に合うか解らなかったから安心
したわ」

「あつ、これもおいしい」

「ああ、このアイスもおいしいな」

「遠慮せずにもつと食べて良いのよ」

「はい」

「エルちゃん、ちよつと抱きついても良いかしら?」

「はい、え?」

急に、視界が暗くなった。柔らかい感触が顔を覆う。懐かしく感じ
る匂いが鼻孔を刺激してきて少しこそばゆい。というよりも、思った
よりも力強くて苦しくなってきた。マズい、苦しい。フィオナさん、
離して、もしくは緩めて、お願いします!ロイド、髭、助けて!

「あつ、エリオット!帰って来たのね、エルちゃんが来てくれたわよ
!」

え、なんて?ガハツ!!腰に凄い衝撃がア!!待って、無理。無理だつ
てこの状況はマズいって!!腰も力強いな!?!?!?どういう状況!?!?!?ねえ、どう
いう状況なの!?!?誰か説明してよ!?!

「フィオナちゃん、ストップだ!エリオットも一旦離すんだ!」

「二人共エルが息出来て無いから!?!」

「あつ」

「――」

二人の声で緩んだけど、遅かったよ。

「――ん、ん?」

「あつ、気がついた!姉さんーエル姉が起きたよ!」

気がつくと僕は横になっていた。感触からベットに寝かせられた
のだろう。頭や腰がまだ少し痛い。どれだけ強く抱きついたんだ。
フィオナさんの何を踏んだのかまるで予想出来ないけど、過去の僕を

知っているみたいだし同じ行動でもしたのかな。本当に記憶が思い出さないと不便である。フィオナさんとは初めてじゃないだろうし、彼女に悲しい顔をさせなかったと思うのになあ。

「起きたのね、ごめんなさいエルちゃん。貴方の記憶が無い事は知っているのだけど、エルちゃんが好きだったハーブティーを貴方も美味しそうに飲むのですもの、ちよつと思いついてしまったの。だから、ごめんなさい」

「…いえ、此方も貴方の事を思い出せないのが悪いんですから」

「そんな事は無いわ。たとえ記憶は無くても、貴方はエルちゃんなんだって解ったから。私はそれで良いのよ」

「…ありがとうございます」

「さ、エリオットも何か言いたいのよね？私は、アルベルトさん達のところに行くから」

「…うん」

フィオナさんは再度僕を抱きしめて部屋を後にした。今度は、とても優しい抱きしめだった。

「エル姉、僕の事も思い出せないの？」

「……ごめんなさい」

「うん、姉さんから聞いてたから大丈夫。…エル姉、抱きついて良い？」

「良いよ、貴方の気が済むまでそうして良いよ」

「ありがとう……」

僕の腰に手を回して抱きつくエリオットくん。彼の事も思い出せていない。でも、微かに残っているのか、自然と頭を撫でるように手を置いた。

「エル姉、エル姉。また、会えて良かった…」

彼から溢れた物を僕は体で受け止める。そして、震えている体を僕からも抱きしめる。不思議とそれに違和感はなく、エリオットくんのが治まるまでそのままだった。

「……ごめんなさい、エル姉の服汚しちゃった」

「これくらいなら大丈夫だよ、それより用事は済んだの？」

「…これをエル姉に返そうと思って」

顔を拭ったエリオットくんは懐から装飾された鞘に入った小型ナイフを取り出した。

「…それ、は？」

「エル姉が誕生日に貰った宝物で、大切にしていた小型ナイフ。エル姉が旅行に行く前に無くしたら困るから僕に預けるって、言って渡して来たんだ」

そう言つてエリオットくんは僕にナイフを渡す。受け取った僕は鞘からナイフを抜いた。刀身に写る景色に何故か私はいなかった。

「エル姉が帰つて来たら返そうと思つてたんだ」

「…エリオット、くん。ごめん、今の私はこれを受け取れない」

「うん、…え？な、何で？エル姉が大切にしていた物だよ!?!」

「うん、だからかな、僕にはこれを大切にしていた記憶が無いんだ、僕にはこれを持つ資格が無いよ」

「そんな」

「ごめん、これはエリオットくんがまだ持つていて」

「エル姉…」

「…私に出来るおまじないを鞘に込めるから、エリオットくんを守つてくれるお守りとして、ナイフを持つていて。いつか、私の記憶が戻ったら改めてナイフを受け取るから」

「……」

「ごめんね、私はまだ君のお姉さんには戻れないや」

僕の回復を待つていたロイドとアルベルトが部屋に入つて来るまで僕とエリオットくんとの間で会話をする事は無かった。ロイド達も気づいているのか何も聞いて来なかった。そして、僕達の帝国旅行は終わった。

「エリオット、良かったの？エルちゃんともっと話さなくて」

「うん、エル姉も話したく無かったみたいだから。それに、今度は僕が向こうに行けば会えるしね」

「あら、泣いていたのに何かあったの？」

「うん、ただ、守れる位強くなりたくなってるだけ」
「…そっか」

七耀歴1198年 4月17日 (筆者?アルベルト)

今日は此処数年で一番の出来事があった。なんせエル坊の元気そうな姿が見れたんだから。4年前のあの事故が発生した時、俺は何も出来なかった。事故を知ったのは事故から3日程後の事だった。依頼をこなした帰りにギルドの受付で、オーラフ・クレイグが情報を募っていた所に俺が帰って来て聞いたのだ。エルフィン一家が列車での事故に巻き込まれ、エル坊が行方不明となっていた事を。俺は信じられずにクレイグさんに詰め寄ってしまった。クレイグさんには悪い事をしたよ、エリオットの関係で知らない中じゃ無いが動転しすぎた。

クレイグさんは事故発生後に現場で調査を行ったそう。その時に乗客の確認も行われ、確認後に乗客はクレイグさんの第4機甲師団に連れられガレリア要塞で調査含め取調を行われていたそう。そこでエル坊含めて多くの乗客が行方不明となっていたそう。行方不明の人数が多い為に遊撃手協会の力を借りたいのだと言う事だった。軍と仲の悪い遊撃手協会だが、猫の手もとい遊撃手の手も借りたかったのだろう。まあ、クレイグさんはその辺は気にしない人だが。俺は直にその依頼を受領して調査に乗り出した。エル坊が乗っていた列車はカルバード方面に向う列車で、エルフィン一家は旅行としてカルバードに向う予定だった。列車事故はカルバードとの境界での事故で、両国から調査隊が軍及び遊撃手で編成され、俺はクレイグさんの第4機甲師団との部隊だった。

まあ、結果だけ言えば成果は得られなかった。事故が事件かも知れないというふわつとした事が解つたくらいか。その後は、軍内部での協議によって軍は調査から撤退していった。クレイグさんからもこの事を謝罪された。遊撃手協会でも調査の撤退もしくは規模の縮小が協議され、撤退する事になった。遊撃手としては撤退したが俺は諦めきれず独自に調査していた。まあ、それが実を結ぶのは大分後だっ

たがな。

遊撃手として依頼を受けつつ調査を続けて暫くたった頃だ。俺は急にギルドから連絡を受けて、慌ててギルドに駆け込んだ。内容はクロスベルでエル坊に似た子が発見されたのだ。大使館にクロスベルの警察官から本人確認の連絡が入ったのだ。大使館には俺がエル坊の知人であり、行方を追っている事を伝えていた為に今回の件で話が回って来たのだった。大使館に届けられた似顔絵と特徴を聞いた俺は、すぐにエル坊だと判断した。髪色と瞳の色が変わっているがいつも見ていた顔だった。確信した俺はその警察官に連絡を取り、ガイと名乗ったその男と帝都で落ち合った。ガイからエル坊の様子を聞いた俺は、茫然として言葉が出なかった。エル坊の現状、記憶喪失の事をだ。想定はしたくなかったがしていた。事故から時間が経ちすぎている。だが、だが、無理だった。

そこからガイとの話は俺が持ち直してからとなったが、エル坊の両親の話となった。エル坊の両親、ターニアさんとロンさんは未だに見つかっていない。俺はこの時、半ば諦めかけていた。あれだけ探しても足跡一つ見つけられ無かったのだから。だが、ガイは諦め無かった。俺の弱音を聞いてもガイはまだ手があるはずだと、諦めるのはまだ早いと俺を引張って行く。そして、俺達は遂にたどり着いた。…たどり着いた。

二人の葬式には参加したかったが、止まっていた遊撃手としての依頼に、何よりもエル坊が俺を見て知らない様な顔をしたら俺が耐えられない。あの元気丸が萎れている姿を見るのが辛い。だから、俺はガイにロンさんが大事にしていたネックレスを託した。これは、ロンさんが旅行前に何故か俺に預けた物だ。ロンさんがいつも身に付けていたお守りの様な物だと言う。もしかしたらロンさんは虫の知らせでもあったのかも知れない。なら自身で付けていたら事故には合わなかったとこれを見て思っていたが、エル坊の為に俺に預けたと思っただけで耐える。ガイにはロンさんが残したプレゼントと言う事で渡し貰う様に頼んだ。今日、エル坊を見て胸元のネックレスを見て少し溜飲が下がった気がした。

それから3年が経った。ガイが律儀にエル坊の様子を報告しに来るからエル坊がだんだん元気になって行った事は知っている。直接会えてはいないが、ノイエス家の皆さんには感謝していた。そんな時に、ガイからエル坊達の旅行の案内を頼まれた。3年前であれば断っていたかも知れない。だが、エル坊に会いたかったし、いい加減エル坊と向き合わないといけないと思っていた。

引き受けてから当日までどんな顔で会うか悩んでいた。でも、エル坊に会うと強がってしまった。だが、少しの後悔もエル坊の髭で吹っ飛んだ。エル坊が俺を髭と言った、記憶が戻った訳じゃ無い様だが、嬉しかった。まあ、その後ああなるとは思わなかったが。

エル坊は変わった所は目立つが、変わらない所も沢山あった。記憶が戻らないのは辛い、エル坊はエル坊なのだど理解できた。エリオットはまだ割り切れないだろうが、時間が解決してくれる、俺もようやく前が見える。

「フフ、俺らしく無い事を書いた物だ。…いつか、いや、今度はガイ達皆で集まりたい物だ」

追加クラフト エリオット

条件 エリオットがエルのナイフを預かる

《ラメンターアミュレット》消費CP30

3ターンの間、状態異常防止

3ターンの間、STR&DEF&SPD50%+

3ターンの間、武器を持ち替える

エルのナイフ STR+200 DEF+50 RNG-2

エルから再度預かった小型ナイフと鞘、あの頃のエルの様に切りかかる。

帝国旅行から少し経ち、僕の日常が戻って来て久しい夏の頃だ。日曜学校を卒業している僕はそろそろ、高等学校の事を漠然とでも考えなきゃいけない。その候補はレミフェリアの医学科の学校か帝国の方の学校が有る。なんなら帝国の方は何かと便宜を図ってくれる。オーラフ・クレイグさんの伝手で良いところを紹介してくれるかもしれない。まあ、何方も行かずにウルスラ病院に行くという就職の手も有るけれど、それをしたらお母さんや姉さんに怒られそうだからちやんと考える事にしてる。とは言っても悩む事には違い無い。選択肢は多いし……どうした物かなあ。

「…ハア、どうしようかなあ」

「……」

「…ハア」

「……」

だから、近くで読書中のロイドにわざとらしく絡む。が、ロイドは捲る手を止めず相手にされなかった。こつちを一瞥もしない奴に僕もぶんすかである。

「ロイドー、無視するなあ」

「…ハア、…ウルスラ医科大学に行けば良いじゃ無いか。医科大学なんだから」

「え、あー…そういえば、ウルスラ病院って医科大学じゃん」

「…ああ、でもエルがなりたいのはセシル姉みたいな看護師だっけ、医科大学じゃ少し違うのかな詳しく無いけど」

「うーん、そうだね、ちよつと違うのかな。最終的には聖ウルスラ医科大学に行きたいけども」

「なら、簡単だな。セシル姉っていう先人がいるんだ、俺よりも確実な事を聞けば良いのだから」

「…まあ、そうだよね。そうなんだけどもさ……」

「…迷惑には思わないと思うからさっさと行くー！」

ロイドはそう言うと、ソファに座る僕を立たせる。そうしてロイド

に押し切られた僕は、姉さんの所に向うのだった。部屋で読書をして
いた姉さんは進路についてと切り出すと、やっと来たのねと呆れた様
な溜息と共に相談に乗ってくれた。結果を言えば、候補は絞れたけど
決めきれなかった。決めきれなかった僕に、ウルスラ病院に直接行く
よりも、外に出て勉強してみた方が良いと姉さんは勧めてくれた。だ
からクロスベル外にも目を向けて探そうと思う。幸いな事にまだ決
めきる時間は有るのが救いかな。で、これが少し前の話で有って此処
からが今日となる。

少し進んだある日の事だ。天気は生憎の雨だったけど僕は家の外
にいた。最近仲良くなったサンサンと遊ぶ約束をしていたからだ。
雨だからどうしようとも思ったけど、サンサンからは屋内でも遊べる
とお呼ばれされたのだ。遊んだ感想は外に行きたい欲求が隠せない
サンサンに、僕が人形や枕を放って紛らわせていた。やはり、雨の日
はやれる事が少なくなる。そのせいだろうか、枕投げは想像よりも
ヒートアップしていた。サンサンには悪いけど僕だって鬱憤がある。
でも、僕だって心は大人だ。だから誤魔化す為に強めに放つ、顔には
投げないから安心してね。だから、顔を狙うのはやめて痛いから。

七耀歴1198年 7月14日

今日はいにくの雨だったけどサンサンのお蔭で退屈はしなかつ
た。サンサンとの出会いは割と酷い出会いだったと思うけど、サンサ
ンの人柄なのかすぐに仲良くなった気がする。その時の事を記録し
てこうかな。

確か、最初は僕がお使いで東通りに向った時の事で、お母さんから
のお駄賃を手に歩いていた僕にサンサンが声をかけて来たんだ。サ
ンサンは店の売り子として声をかけてたんだけど、僕はその時少し浮
かれ気分だった。だって、お使いの駄賃が余ったら小遣いにして良い
と言われていたからその使い道を妄想していたのだ。気持ちが良い
む物だ。だから、サンサンのに気づかなかった。まあ、それで話が終
わる事だつてあるけど、サンサンは何故か諦めずに再度僕にアタック

した。というか、物理的に跳びついて来た。僕はそのアタックに耐えずヘッドスライディングをかました。そこからは、訳がわかってない僕と来ると騒ぐサンサンの図が東通りに完成する。次第に愚図るサンサンにあわあわする僕と周囲の人で2枚目も画かれた。3枚目が描かれる前に《龍老飯店》から迎えが来てその場は解散となった。その後、家に謝罪に来たサンサンと話して仲直り、仲直りをした。それからサンサンの人柄に僕が引かれて友達となったのだ。

明日も遊ぶ仲になった僕ら、これからも仲良く出来たら良いと思う。でも、今日の枕投げは僕の勝ちだから。

七耀歴1200年 2月5日

日記の日付を確認して気がついたけれど、あの帝国旅行からもうすぐ2年が経とうとしている。旅行の原因となった例の教団事件の影響も落ち着き、世間も病院も普段通りの生活に戻って行った。あの時に運ばれた患者達も個人差はあれど回復傾向にあり、退院や通院に切り替えている患者も多い。それで僕やロイドが手伝う事も無くなっていて、それぞれの日常を過ごしている。ロイドも僕以外の友達とも遊ぶし、僕もサンサンなんかと引き続き遊んでいた。あとは、悩んでいた進路の事だけでも、やっぱり聖ウルスラ医科大学病院に行く事に決めた。まあ、その為に勉強しなければならないので、姉さんに教わりながらもくもくと励んだ。そのお陰で無事に内定を貰っている。春からは看護師見習いである。

僕以外で言うと、やはりアリオスさんの事だろうか。昨年、突発的に起こった事故にアリオスさんの妻サヤ・マクレインさんと娘のシズクちゃんが巻き込まれた。その結果、サヤさんは亡くなり、シズクちゃんの目には大きな障害が残る事になった。僕も二人とは関わりがあっただけに酷く悲しかった。葬式にも参加したけど、あの時のアリオスさんの顔はとても怖かった。シズクちゃんは聖ウルスラ医科大学病院に入院し、完治に向けて奮闘している。最初は酷い昏睡状態で御見舞も出来なかつたが、今では多少の会話が出来る程に回復している。前に御見舞に行った時は、見えない目の代わりに耳で人を察知する技術を見に付ける訓練を行っていた。目の状態は良くなって、今の技術では完治は難しいみたい。様々な方法を試しては失敗しているが、本人達が諦めていないのがせめてのに僕は感じている。しかし、事故の後にアリオスさんはクロスベル警察を辞めてしまった。ガイさんも止めはしなかつたそうだ。理由は様々なのだと思うけど、ただ何か大切なものが壊れる予感がした。

「…ふう、ひとまずこんな所かな。…思い返すと色々、あったなあ。そ

れでも、アリオスさんの事はやっぱり大きいな。サヤさんにはお菓子や料理も教わったし、シズクちゃんとも良く遊んでたから特にね。……」

机に置かれた新聞を手取る。そこには、『クロスベルの新風！遊撃手アリオス・マクレイン！』の見出しが書かれている。

「ガイさんが気にしてないと言っているからと言って、僕が気にしない訳にもいかないよね」

月に何十もの依頼をこなすその姿は、かつての姿とはかけ離れていた。ロイドや僕が憧れたクロスベル警察の若手コンビの片翼のその姿に胸を痛める思いだった。あれから二人が仲良く話合う姿は見られない。

「どうにかならないかなあ」

部屋の天井に吐き出すが虚しく消えるだけだった。

「……」

「エルー、ご飯の時間だぞお」

「……あ、はいー！」

モヤモヤ気分のまま時間が過ぎ、ご飯の時間になり今日もお泊りのロイドに呼ばれて僕は部屋出た。

夕食後、僕は暇そうなロイドを引き連れ部屋に戻る。

「さて、ロイドは姉さん達の結婚式の準備はしてる？」

「……呼んだ理由はそれか。来年の予定だろ？早くないか」

「やっとなんだよ？早いに越した事ないって！」

「……まあ、そうだけど」

「でしよお、だからそれについて話そうと思ったんだ」

一ヶ月程前のガイさんとロイドを招いての夕食時に姉さん達からやっとな結婚する事が伝えられた。昔からの二人を知っている方からすればまだだったとか言われそうなのだが、一年後に行うと二人から言われて逸る気持ちが抑えられないのだ。……まあ、ガイさんに淡い気持ち？があつたのは否定しないけどさあ、それよりも祝福の気持ち強いのだ。少し大人になったから思うけど、ガイさんからは妹みたい

な感じだったのだろうしね。だから、二人の結婚式が良いものとなる為に僕は準備をしたいのだ！

「…準備と言っても俺達が出来る事ってあんまりないよな」

「えっと、会場？」

「それは兄貴達とプロの人がするな」

「料理！」

「それも」

「……」

「…そうだな、身支度とか位かな」

「…そんなあ、せっかくの結婚式なのに出来る事無いの？」

「沢山祝福する事が一番かな」

「そっかー」

逸る気持ちを抑えられない僕はベッドに身を投げる。それを呆れるようにロイドはため息をこぼす。

「…話は変わるけどエルは最近のアリオスさんに会ったか？」

「うん？アリオスさん？…会ってない。ほら、その新聞位だよ」

食事前に見ていた新聞を指差す。

「ああ、この前の特集か」

「何か気になるの？」

「兄貴が心配してたんだ」

「まあ、遊撃手になってから忙しそうだもんね」

「ああ、警察の時はなんだかんだ楽しそうだったのに今は追い詰められてるようだって」

「…サヤさんが亡くなつて落ち着ける余裕が無いのかもね」

「そうかもしれないな」

「シズクちゃんには時間作って会いに行ってるみたいだよ。御見舞の時に嬉しそうに話してくれたから」

「…そっか」

その後は少し話して解散した。アリオスさんには僕もお世話になった事がある。これ以上何も無ければ良いけれど、感じた嫌な予感
は頭の片隅に消えてくれなかった。

七耀歴1201年

ガイさんが死んだ

ここ最近、連日の様に雨が降っている。なぜだか嫌な感じが朝からしていた。雨の影響だろうか？何事も無いと良いけども。それはそれとして、今日もサンサンの家遊びに来ていた。サンサンと遊ぶ日は雨が多いのだが、誰かの体質だろうか？いつもの様に遊ぶも雨が酷くなつて来たので、そろそろ帰ろうかと言う所で、ロイドが傘を持って迎えに来た。どうやらお母さんが心配して迎えに寄越したそうだ。サンサンはもう少し遊びたいと愚図ったけど、嫌な感じが消えなかったからその好意に甘える事にした。サンサンにまた遊ぶ約束を取り付けて帰路につく。ロイドとの道中は特に会話する事は無く、ザーザーと傘を打つ雨の音だけが響いていた。だからだろう、本来なら拾っていた甲高い発泡音を聞き漏らしたのは。

「…ロイド、今日ってガイさんの仕事はやいんだよね」

「そう聞いている。アリオスさんに会うんだって朝聞いたし、夕食には間に合わせるとは言っていたな」

「雨、止まないね」

「……ああ、更に強くなるそうだ」

「あつ、エルちゃんにロイドも此処にいたのね。…ちよつと、私これから外に出て来るから二人は家にいてね」

家に帰った僕がロイドとゆっくりしていると、傘を2つ手に持つセシルが部屋の扉から外に出るなど忠告を告げ、部屋を後にした。

「あつ、姉さん。…行っちゃた」

「…だいぶ急ぎだった、兄貴の迎えか？…それにしては」

「ロイド、気になるならこっちにも話して」

「ああ、気になったのはセシル姉の表情が険しかった事と傘を2つ持ってた事だ」

「そうだね、ガイさんが傘を忘れたから届けについて感じじゃ無かったね」

「それに兄貴は、傘を差すよりも走るからわざわざセシル姉に頼んだりしない」

「じゃあ、ガイさん以外の用事かな？お父さんとお母さんは家にいるし、…お友達？」

「…考えてもしかた無かったかも、ごめん」

「いや、良いよ。僕も気になったから」

姉さんの様子を気にしつつも出来る事は無かったので、夕食までロイドと部屋で過ごしてた。夕食に姉さんとガイさんの姿は無く、お父さんもお母さんも姉さん達の用事を詳しくは知らない様子だった。ただ、ロイドは今日家に泊まる事になっているそうだ。何かがあった様だけど、わからないまま今日は寝る事になった。結局、姉さん達に会えずじまいだった。

「姉さんが出たのってガイさん関係だよね？」

「ああ、マイルズさんも言っていたからな。…ただ、兄貴に会いに行っただって事だと良いけど…」

「姉さんの様子を見るに、何も無かったって感じじゃあ無いよね」

「…朝からのこの嫌悪感が嘘だと良いな」

「…ロイドもかんじてたの？…僕もサンサンの所で遊んでる間、ずっと感じてた」

「…」

「ガイさん、大丈夫かな」

「…」

眠りに着いた私は夢を見た。帝都でエリオットとロイドが私を追いかける。私は逃げている？髭が私の前を塞ぐ。私は急停止から向きを替えて逃げる。住宅街の公園に出るとセシル姉がベンチに呼ぶ。逃げてる私はセシル姉に謝りながら道を進む。髭達は変わらず私を追う。次に出たのは水路沿いの道で通行人が疎らに歩いている。お

父さん達が私を見て微笑んでいる。何故私はこの夢を見ているのだろうか。逃げていている私はカトラムの駅を越して大通りに出た。いつの間にか髭達は見えなくなっていた。ようやく巻いたのかと私は歩みを緩めた。旅行で見た大通りに比べて古い様に感じる。なんとなくだけど。改めて周りを見渡すと特に懐かしく感じる物を見つけた。それは、……？なんで拳銃？

「はっ！……部屋？……夢から冷めた？」

「……起きたか、エル。着替えてリビングに来てくれてってセシル姉が呼んでるぞ」

「うえ、ロイドか。……うん、解った」

「セシル姉は急いでるみたいだから早く」

そう言つて、ロイドは部屋を出て行つた。ロイドを見送つた僕だけど、姉さんが待つてるみたいだから手早く着替える。着替えながら僕はあの夢について考える。ロイドに髭に登場するのは僕の知り合いばかりだった。……その割にはガイさんがいなかったな。それに最後のは見た覚えは無いよな？

「エル、着替えたか？」

「うん、早く行こうか」

「待つてたのは俺だからな」

「細かいよ」

「……」

着替えたのを確認に来たロイドと軽口を交わしつつ、僕は部屋を後にした。リビングまではすぐなので此処も会話は無かつた。リビングに入るとすぐに姉さんの姿が入つて来た。姉さんは昨日に比べて、少しやつれた様子だった。僕らが来たのを見て、姉さんは椅子へ座るように促した。椅子に座つた僕等の顔を見て、姉さんは口を開いた。

「……二人共、心して聞いて欲しいの。……昨日、ガイが亡くなつたの」

「え」

「！」

「はじめは雨の中、市内で倒れているのが発見されたの。そこで、病院

に運ばれたのだけど手遅れだったみたいね。私が駆けつけた時にはもう……」

「あ、っ」

「……セシル姉」

「……フフ、ごめんなさい。私も整理がついてないの。ガイには昨日の朝もあつたから、余計に考えられないの」

「……」

「でも、朝になったら少し落ち着いたのよ？だから二人にこうして話せているのだけれどね。」

突然の事に僕はうまく反応出来なかった。ロイドは姉さんの心配をしてたけど、痩せ我慢に近い気がする。話した姉さんも多分痩せ我慢で、涙は出さなかつた。この後、お父さんとお母さんと一緒に病院に向かつた。そして、ガイさんの姿をこの目に刻みこんだ。淡い思いは冷たい体身を貫く事は無かつた。だから、刻む。あの右手の温もりと共に。

葬式はすぐに行われた。葬式には沢山の警察関係者に加えて、遊撃手協会からも出席者がいた。というか、髭が来ていた。ガイさんの人脈の広さは凄いのだと感じた。……でも、アリオスさんの姿は見えなかつた様な？気の所為かな、一番の相棒だつて言っていたあの人が来ない事は無いだろう。お髭の上司さんは来ていたし。

式は人数の割に静かに終わった。お墓も大聖堂裏に作られた。この頃には、ロイドも姉さんもガイさんの死を飲み込めたようで、下を向く回数も減っていた。前の日常には戻れないけど、近づける位にはなつて来た。家の雰囲気明るくなりだして僕は隠れて安堵していた。

僕の日常が前に近づいている頃、僕の周りには着々と変わりつつあつた。ガイさんの相棒のアリオスさんが警察をやめて、遊撃手になった事やロイドが警察になるため学校に行く事を決めた事等、身近の変化に市内でも大小の変化があつた。そして、僕の生活も変化している。「エルちゃん、またで悪いのだけどこれらをお願い出来る？」

「えーと、了解！すぐに行ってくる」

僕は病院側のご厚意で資格が取れるまで見習いとして働かれて貰っていた。

「くっ、相変わらず、高い、なあ!!」

医療品の補充なりを日夜やっている。いずれは資格を取って姉さんみたいに働くのだ。下積みって奴だけど背丈が伸びてくれないとずっと苦勞するんじゃないだろうか。

七耀歴1203年 11月21日

ガイさんが亡くなってから2半年が経つだろうか。亡くなったと聞いた時は誰もが傷つき、癒えぬまま半年が経った。僕もまだシヨックは残ってる。なにせ大切に思ってた人が亡くなったのだ。でも、誰よりも前を向いていたのは姉さんだった。誰よりも悲しいはずの姉さんなのに。それを見たロイドは警察学校への進学を口にした。ガイさんのような立派な警察官になると。反対意見などは無いが、大丈夫だろうか。ロイドを見つめた時のロイドの目はとても強い意志を感じた。だから心配はしてないけど弟がこんなに大きく見えるとは思わなかった。

ロイドに続く様に僕も聖ウルスラ医科大学病院にアルバイト的に職についた。今は雑務に勉強に二足三足の草鞋を履いている。忙しい中でガイさんへの気持ちに誤魔化していた。

そういえば、警察官になるためカルバートで生活しているロイドが来年帰って来るそうだ。手紙なんかはやり取りしていたけど会うのは久々だ。立派になったであろう弟の姿を姉としてしっかりと見なければなるまい。楽しみである。